【論　文】

一断酒人からみた東京断酒新生会いまむかし
立木鐵太郎氏からの聞き取り

岡　知史（社会福祉学科教授）

要旨：東京断酒新生会は 1958 年に日本で最初に結成されたアルコール依存症者の自助集団である。その東京断酒新生会で長期間、会員ならびに役員として活動してきた立木鐵太郎氏に往年の断酒会について語ってもらった。断酒会については、その会員の個人的な回復についての研究は多いが、組織についての研究は少ない。また断酒会についてのオーラルヒストリーを含む研究は、ほとんどないため、本論文は貴重な記録を提供している。そこでは多くのことが語られたが、特に以下の 3 点に注目したい。第 1 に、かつての断酒会は、現在では考えられない方法で、非常に積極的に会員を支援していた。その典型が「往診」と呼ばれる断酒会のリーダーによる家庭訪問であった。第 2 に、立木氏が「タカ派」と呼ぶ人々の存在があった。自分の断酒にも厳しいが、他の人にも厳しい断酒を求める。そういう人たちが断酒会にいた。第 3 に、当時の断酒に対する考え方である。断酒会を支援する医師からの助言によって「指針と規範」を重視する全日本断酒連盟の基本的姿勢が形成され、現在に至っているが、それ以前に東京断酒新生会に脈々と流れていた断酒の考え方が語られている。

はじめに：断酒会についての先行研究

東京断酒新生会は 1958 年に日本で最初に結成されたアルコール依存症者の自助集団である（東京断酒新生会 , 2008）[1]。その前身は日本禁酒同盟のもとに 1953 年に結成された断酒友の会であったが（上堀内 , 1979）、そのリーダーの上堀内自身が酒害者ではなかったために自助集団とは言えなかった。その東京断酒新生会は、1963 年、高知県断酒新生会の呼びかけに応じて、全日本断酒連盟（以後「全断連」と記載）を結成する（全日本断酒連盟 , 1983）。その会員数は 2002 年には当時の理事長だった橋本勝之は「およそ 6 万人」としていたが（橋本 , 2002）、それは家族を含めた数であっただろう。2004 年度は「正会員約 12000 人」とされた（全日本断酒連盟 , 2004, p. 10）。現在、その会員数は減少しつつあり、それでも 2022 年 4 月現在、東京断酒新生会には 296 人、全日本断酒連盟には 5219 人の会員が集まっている（全日本断酒連盟 , 2022）。

この長い歴史と伝統ある自助集団の先行研究をみると、それは 4 つの群に分けることができる。まず非常に多いのが、断酒会会員個人と、その回復に焦点を当てる研究である [2]。断酒会の研究は、大橋らの 1970 年代の研究を先駆とする。大橋 (1970) 、大原・高木 (1972) および大橋・吉兼 (1979) は高知県断酒新生会の会員を対象に、飲酒癖や会への参加状況等のアンケート調

査を行っている。佐藤・唐住・荻野・鷲山 (1973) は同様の調査を静岡県断酒互助会で、洲脇・蒲田・高田・大井 (1974) は岡山断酒新生会で、大橋・石井・石川 (1977) は主に東京断酒新生会で、大橋 (1978) は北九州市断酒友の会で、高橋・堀井・藤本・洲脇・西井 (1981）は岡山断酒新生会と津山新生会で、土井 (1987) は徳島県断酒新生会で、猪野 (1991) は三重断酒新生会で、篠原・伊藤・水野・小林・安田 (2010) は北海道断酒新生会で行っている。清水 (1978) 、杉山 (2008)、杉山・谷岡・上野・片山・越智 (2007) も同様の調査を行っているが、それぞれ調査の実施場所は記載していない。特に土井 (1987) の研究は、医師として 10 年間、毎週のように断酒会例会に通い、それに 3 回以上出席した 133 名の断酒会会員を事例研究として分析したものであり、出色の研究である。

それに続いて、主として質的インタビューを用いて断酒会会員の回復プロセスを詳細に調査したものがある。それは、断酒会活動を通じての個人の回復過程（福田 , 2003; 方 , 2006; 心光 , 2002）に注目するものであった。特に断酒会のなかで「聴く」ことの意味を考察した東 (2009)、断酒会での「語り」に注目した松島 (1993)、断酒会の「語り」を精神障害者ピアサポーターのそれとの比較をした朝比奈 (2021)、「語り」と当事者性を追究した心光 (2010)、経験の意味を問うた山本 (2010)、断酒会のなかでの学び方を日本の文化の文脈のなかで研究した Smith(1998) の研究がある。断酒会のスピリチュアリティに関心を向けた丸田 (2013)、スピリチュアリティを具体化したものとしての「断酒道」を論じた研究もある（Chenhall & Oka, 2014, 2016; Oka, 2011, 2013; Oka & Chenhall, 2015）。他には、断酒会員の抑うつや心理社会的要因を分析した加藤・武田・三宅・横山・大井田 (2004)、断酒会への参加で生じる意識の変化について量的に調査した小俵・石原 (2009a, 2009b)、それについて質的に調査した岡田 (2006) の研究がある。断酒会会員の回復状況を婚姻状態との関連で調査した一連の研究として、片岡・杉山・谷岡・片山・吉田・橋本・大森 (2009)、片山・杉山・片岡・谷岡・橋本・吉田 (2009)、杉山・片岡・谷岡・橋本・片山・吉田 (2009) があり、断酒会に夫が参加する夫婦を一般の夫婦と調べた研究としては大野 (2003)、断酒会に通う夫婦を対象とした前田 (2012) の研究がある。一方で独身断酒会会員に着目した研究もある (三好・森本・橋本・谷渕 , 2021)。就労との関連で追究した研究 (岡田・齊藤・藤本・園中 , 2009; 佐野・巽 , 2019) もある。さらに断酒会会員の個人の属性として、女性会員に焦点を当てた山口・篠原 (2013)、山口・篠原・伊藤・デッカー (2013)、高齢者を調べた研究 (堀井・松下・山本・田所・橋本 , 2004; 清水・原田 , 2020) がある。自殺未遂歴のある男性の断酒会会員にインタビューをした西田・原田 (2017) の研究もある。

次に、断酒会と専門職や支援機関、地域社会との関係を論じた研究で、医療・保健領域の制度や専門職との関係（伊藤 , 2012; 小澤・水野・篠原 , 2013; 高木 , 1981; 與座 , 2012）、ソーシャルワーカーとの関係（真野 , 1981）、政策との関係（四戸 , 2001）が考察されている。特に 1995 年に発生した阪神・淡路大震災との関連での研究もある（中田 , 1996, 1998; 野田 , 1998; 清水・麻生・野田 , 1999）。 松下 (1985) は島根県断酒新生会と、その理事長が初代園長となった救護施設「新生園」について報告している。人文地理学からの断酒会の研究（中島 , 2016,

2020, 2022a, 2022b）も、この群に入るだろう。

第 3 の群としては、断酒会を全般的に紹介したものである。これは短いものを入れれば非常に多くなるので、いくつかあげるだけにとどめると、断酒会会員自身によって執筆されたものと（荒木 , 1997; 平坂 , 2018; 小林 , 1986, 2000; 中本 , 2007; 大野 , 1980; 大槻 , 2013, 2017; 坂元 , 2018; 田所 , 2004; 飛田 , 1981; 植松 , 2009）、医師によるもの（下司 , 1972, 2004; 森岡 , 1988; 齋藤 , 2016; 辻本 , 1983）、その他、眞崎 (2013)、海外の研究者向けに書かれたものとして Chenhall & Oka (2009) がある。

そして第 4 の群が、断酒会の組織または文化の研究である。これは大森・今津 (1979) が全日本断酒連盟に所属する全国の断酒会に自治体からの補助金等についての簡単なアンケート調査をしたことが先駆的なものかもしれないが、組織論に基づく深い考察については、松下（1990, 1997, 2007, 2009）が代表的な研究者である。特に松下 (1997) は仙台市の断酒会の組織的問題を深く掘り下げ、類を見ない研究になっている。また中村･東野･霜田 (1975) は、関東･東海･甲信越の 26 断酒会の発足経緯を調べ､断酒会の「『イエモト』制度的特性」を明らかにし、その知見は土井・吉田・江藤 (1979) によって徳島県断酒会の分析に用いられた。また廣瀬・加藤・須田 (1988) は、岐阜県飛騨地方の「小グループ断酒会」に注目した研究を行っている。その他、集団の文化 (清水 , 1980, 1986)、断酒会の会員減少問題 (豊山 , 2016)、社会運動としての断酒会 (豊山 , 2013)、家族療法との比較 (石井 , 2017)、断酒会会員相互の人間関係 (豊山 , 2020)、断酒会の経営管理 (本間 , 2009)、断酒会のリーダー (人見 , 2009; 熊澤・米山 , 2011; 三好 , 2019) に注目した研究がある。

この研究の目的と方法

こうして断酒会についての研究をふりかえってみると、これほど長い歴史をもつ会であるにもかかわらず、またこれほど多くの論文が書かれているにもかかわらず、オーラルヒストリーのような研究がほとんどないことがわかる。断酒会を担ってきた人たちが、どのような思いでそうしてきたのか、それを当事者の証言から歴史的に残すものが欠けている。多くは研究者の視点で状況を分析しようとするものであり、当事者の視点を入れる研究はあるとしても、現在の状況の分析に焦点があてられている。過去のことを当事者の視点からまとめる研究がないのである。

そこで、本稿では、この東京断酒新生会を担ってきた人から聞き取りをし、それによって日本初の自助グループといってよい東京断酒新生会の歴史の記録としたい。インタビューについては、東京断酒新生会にて今年 1 月に 52 段を取得された立木鐵太郎氏にお願いした。東京断酒新生会にて「52 段」を取得するとは、断酒会の活動を 52 年間続けたことを意味する。インタビューは 2016 年 8 月 4 日、午後 1 時から 4 時まで上智大学の筆者の研究室にて 3 時間にわたって行った。

立木鐵太郎氏は 1939（昭和 14）年 5 月 12 日生まれ。現在 83 歳（インタビュー時は 77 歳）

である。早稲田大学教育学部を卒業後、毎日新聞社に勤務。1970（昭和 45）年からアルコール依存症の治療を受け、1971（昭和 46）年 31 歳で断酒会の会員となり、以後（インタビュー時において）45 年間、断酒会活動を続けてこられた。その間、地域断酒会（京王断酒会）の支部長（1976-1981）、東京断酒新生会の理事長（2002-2008）、全断連の副理事長（2006-2011）という重要な役職を全うされている。東京断酒新生会を語るにはもっともふさわしい人物であると言える。

立木氏には、事前にオーラルヒストリーの論文である南雲・梅崎 (2013) と平沢 (2016) のコピーを郵送し、今回の調査のイメージをお伝えしたが、事前に特に何を聞きたいかという具体的な質問は用意しなかった。かつての東京断酒新生会の様子を思いつくままに語っていただこうという趣旨であった。

インタビューの記録のなかの個人名、地名、固有名詞等は、倫理的配慮から、著名な人物を除いて適宜伏せ字にしている。読みやすさを考慮して中略した部分がある。また読みやすいように付け加えた文字、状況の説明等は（　）で示している。

この研究から何がわかったか

すでに述べたように、断酒会の研究は 1970 年代からかなりの論文が出されているが、オーラルヒストリー的なものは、ほとんどない。そのため本論文では、かつての断酒会（正確には、東京断酒新生会）についてまだどの論文でも書かれていなかったことが多く明かされている。そのなかでも、現在の断酒会のあり方を考えるうえで、以下の 3 点を重要なこととしてあげておく。

ひとつは、かつての断酒会は、現在では考えられない方法で、非常に積極的に会員を支援していたことである。その典型が「往診」と呼ばれる断酒会のリーダーによる家庭訪問であった。

第 2 に、立木氏が「タカ派」と呼ぶ人々の存在である。断酒に対する厳しい姿勢をもつ断酒会員のことである。自分の断酒にも厳しいが、他の人にも厳しい断酒を求める。そういう人たちが断酒会にいた。「現代社会ではやさしさがもっとも優先される対人関係のルールとなっている」（森 , 2008, p. 14）ため、今日の断酒会では、あまり見ない人たちである。

そして最後に、上記の「タカ派」とも深い関連があるが、当時の断酒に対する考え方である。断酒会を支援する医師からの助言によって「指針と規範」を重視する全日本断酒連盟の基本的姿勢が形成されたが、それ以前に東京断酒新生会に脈々と流れていた断酒の考え方が語られている。

以上の三つからわかることは、現在の様子とは少し違う姿をかつての断酒会はもっていたということだ。時代の流れは大きく、過去に戻ることはできないが、会員数が減少していく現状への対策を考えるヒントになれば幸いに思う。

なお以下のインタビューは長文だが、読者には全体を読んでいただきたいと切に願う。なぜなら一部だけを拾い読みをすると、立木氏の発言の趣旨を誤解することになりかねないか

らである。批判的な言説も多く含まれているが、最後まで読んでいただければ、立木氏の温かい人間愛と、断酒会会員とその関係者への深い敬慕、洗練されたユーモアのセンスが伝わるはずである。立木氏は、インタビュー当時は70代後半であったが、メモ等を一切みることなく驚異的な記憶力で、穏やかな口調ながらも、よどみなく一気に話された。以下のテープ起こしした部分も、話された順序は変えずに掲載しているが、一貫した内容に読者も驚かれるはずである。ただ紙数の制限があるため、削除した部分もかなり多いことを断っておく。

生まれてから就職するまで

立木：（生まれたのは）昭和14年5月12日ですね。77ですよ、もう。僕は満州生まれです。父親が満鉄の調査部員でしたから。昭和14年に満州で生まれて、昭和16年にはもう内地（への）転勤命令が出て、それで戻ってきて（満州鉄道の社命による異動で）大阪から目黒に行って、（ところが）東京は爆撃がひどいっていうんで、昭和19年、昔でいう疎開（をした）。母親が長崎の古い浄土真宗のお寺の娘なの（で）、長崎県のお寺へ疎開して、終戦。だから原爆に遭ってるんですよ、8月9日の。ただ長崎（は）広島と違って、ものすごく丘陵、山がありますから、昔のバスで爆心地から1時間ぐらい離れたとこなんで助かった。ちょうど6歳の時です。午前11時ごろ落ちたんですね。たまたま、お寺の御堂の大きな座敷で、子どもだから寝転んで（いた）。いわゆる役僧っつって修行僧が3人ぐらい若い人が（いましたが、）全部爆風ですごい勢いで吹き飛ばされた。それからガラス戸が縁側のも全部欠けて飛んで、仏さん飾ってある御堂（の）50畳の天井がめくれて、すごい爆風ですよ。

岡：（立木さんは）怪我はされなかったんですか。

立木：僕は、横になってただけですから。役僧さんは骨折った（人が）いましたよ、吹き飛ばされて。原爆のすごいのは、あの風がすごいんですよね。それで終戦になって引き上げてきた。引き上げてきたのが練馬です。それから小学校4年の時に新宿の、今でいう戸山町へ来て、戸山町でずっと大きくなって、大学も早稲田ですから歩いて行ける距離ですからね。昭和37年4月1日に毎日新聞社に入社して、昭和46年に断酒会入会ですから9年後にもうアル中なっちゃったってことですよね。

岡：早稲田では何を勉強されてたんですか。

立木：教育学部。全然、就職口がなくってね。それで37年に毎日新聞社に入って32年間、一応勤めたんですよ、首にならないでですね。

断酒会に入る：そのころの医療

立木：断酒会員になったのは、昭和46年ですから、当時としては記録的な若さだった。入った時点で31歳だった。その当時、覚えてるんだけど、東京には足立（断酒会）に○○くんって27歳の男が入って。その次に僕(が)若かった。平均年齢がやっぱり64～65歳です、昔は[3]。

岡：それは意外だなあ。今（断酒会は）高齢化（している）っていいますが、その当時もそういう感じ（なんですね）。

立木：今ほどアルコール依存症についてのケアの体制が環境的にないから、行き着くとこまで行って（それから断酒会に）入ってきたんですよ、みんな。今はだいたい病院が、アルコール依存症（患者は）断酒会（に）行けっていう（指導がある）わけでしょ。（当時は）そんなものない。（アルコール依存症患者は）やっぱり「人間のくず」みたい（に扱われる）部分が多くって。だって45年前ですから（依存症を）病気と認識していない精神科医（は）いっぱいいましたよ。専門病院（や）専門家はいなかった。（病院は）もう牢屋みたい。もう私立の病院は全部牢屋です。閉じ込め主義です。（以前の治療は）電気ショック（を）やったり、（酒を）「飲んだらこれだぞ」っていう（脅しをかけるような）非常に野蛮なもんですよ。お仕置きなんですね。電気ショックってあったんですよ、本当に○○病院っていうのは、僕（その近所に）一時住んでまして、僕（は）釣り好きだったから、○○川の支流でよく釣れる。（それが）ちょうど○○病院の前になる。「ぎゃあぎゃあ」って（患者の叫び声が）聞こえるんですよ、電気ショックだから。ひどいでしょ。電気ショック療法っていうの(を)なんで(それを)知ったかっていうと、断酒会員（で、○○病院の）OBが入ってきたから、「ぎゃあぎゃあ言ってたな」（と私が言えば）「あれ、治療ですよ」（と教えられた）。治療と称して、電気ですよ。おっしゃったように平均年齢が高かったっていうのは、いわゆる断酒会に至る経路の指導がなかったってことですよね、社会的に。高齢化って今始まったことじゃないですよ。

岡：立木さんは、医療には関わらなか（ったんですよね）。

立木：僕はね、入院はしてないんです、精神病院へ（は）通院です。具体的には、抗酒剤を取りに行ってた。毎月1回だったかな。だから精神病院の門たたいたのは、入会する1年前、昭和45年（です）。家族が見つけてきたんですよ、断酒会を。で、断酒会に行ったら「病院に行け。見てもらえ」って（言われた）。

岡：先に断酒会つながってから（病院に行ったんですね）。

立木：（先につながったのは）断酒会でした。当時、新聞広告を断酒会は出してたんです。告知（ですね）。でっかい（記事）じゃないですよ、こんな（小さな）1枠。「お酒でお困りの方はこちらへ連絡してくれ」と。そこが（杉並断酒会会長の）○○さんの自宅の電話で。

岡：それは新聞社が、無料で出してくれ（てい）たわけですよね。

立木：無料です。ていうのは、断酒会でお金はないけど、告知広告を出してくれないかっていう葉書を、新聞社にしょっちゅうばらまいてた。（その告知）をうちのおふくろが（見た）。おふくろはかなり早くから、僕（が）おかしいっていうのを、（僕が）結婚する前から（知っていた）。（と）いうのは、これは、おふくろのお父さん、つまり長崎の○○寺の住職だったんですが、今でいうアル中だった。まあ本当に謹厳実直な（人で）ね。読経を朝するときなんか、本当、ほれぼれするような声音（だった。でも）酒飲むと、がらっと変わるんです。おふくろはそれ見てたわけですから。で、「おまえ、飲み方とか酔い方とかしゃべり方、おじいちゃんにそっくり（だ）。嫌だ、嫌だ」って（言っていた）。おふくろ（は）早かったですよ、出足が。女房のほうは（親族が）誰も酒飲みいないから、分かんないんすね。親父は下戸ですから。おふくろが、新聞広告見て（断酒会に）飛び込んでったんですよ。そしたらAさんっていう大先輩が出てきて、「いっぺん病院で診断してもらって（ください）」ってんで、○○療養所を教え（られ）て。それで（そこへ）行ったんです。あとはいろいろ問診したら、やっぱりアルコール中毒（だった）。

診断を受けてから

立木：僕、半世紀、断酒会に行って（いますが）、メンタル系で病名が4（回）変わった病気ってありませんよ。最初「酒精中毒」だったんですよ。僕の診断書（も）酒精中毒。もう伝説の言葉（ですよね）。「酒精中毒症」という診断書もらって。その次が「慢性アルコール中毒症」だ。それから「アルコール依存症」。で、また呼び名変えようっつうんでしょ。「症」っていう言葉やめようっていうことで（すね）。つまり得体の知れない病気ということですよ。半世紀で4回も名前変わる病気ってないじゃないですか。本当に異常ですよ。

岡：それでお医者さんが、断酒会に行きなさいというふうに言った（んですね）。

立木：断酒会（に行けって、医者は）あのころ言わないです。当時、断酒会に顔出すお医者さんっていうのは、あんまりいなかったですね。だから、アルコール依存症の患者が来たら治療はするけど、自助グループに行けというアナウンスはしてなかった。その時は、女房はAさん（から聞いた）話で、お酒を止める薬（抗酒剤）があるそうだ（と）。それ（を）飲むと（飲酒）も止まると思いますから、だから抗酒剤くださいって（医者に頼んだ）。（ところが）先生、どうしちゃったか分かんないんだけど、すぐ（に薬は）出せませんと（言う）。僕も（医者と）議論したり生意気言ったもんだから、これ駄目だとは思ったんじゃないですか。だから、すぐ（薬は）出さない。要するに僕、節酒はできるってことで頑張ったわけです、「僕は（酒は）2合で止めるから」っていうことで。（それ）で、「来月（まで）あんたやってごらんなさい、節酒できるなら」（と医者から言われた。ところが、その結果は、節酒は）全然でき（なかった）、2合どころじゃなくて余計めちゃくちゃに（飲んでしま）って。で、ちょっと反省して来月（また病院に）行ったら、「あんた、やめらんないでしょ」って（言われた）。「ええ、やめらんな

かった」と（答えた）。「だったら、この薬を飲んで（ください。ただ）酒飲むと（この薬は）危ないから（気をつけて）。毒薬ですよ」ということですよね。

もう一つ（言われたのは）、1 カ月の待機期間をおいて、節酒できないってわからされて、「やっぱりあなた、要入院ですよ」って（言われた）。「今月末、12 月末に退院する（人が）いるから、あなた 1 月から（病院に）入れ」って話に（なった）。そして（一方では）12 月中に断酒会に入れ（と A さんには言われた）。「やっぱり断酒会に入らないと、あなたは駄目ですよ。（断酒会に）入ってから入院しなさい」っつうんですよね、A さんは。（そうしていたら）電話来ましたよ、病院から。「ベッド空いたけどどうする、あしたから入院するか」って（聞いてくる）。だからいろいろ考えて、家族会議もやりました。親父、おふくろ。それから女房。だけどここでね、いくら飲み助が多い新聞（社）でも、やっぱりまだ（入社して）10 年もたたないで（精神病院に）入ったってのはまずいから、（まずは）断酒会でやってみようと。で、駄目なら入院だと。（それで）病院に「すいません、断酒会でやってみます」って（答えた）。それを（医者が）知ったら条件出されて、「必ず毎月 1 回、薬取りに来い。診断するから」と。僕は、だから情けない話だけど、抗酒剤でやめられた人ですよ。

断酒会に通いはじめた

岡：行き始めて、断酒会に。どんな感じでした？

立木：嫌な感じだったですよ。ご承知のように東京には 24 の地域断酒会があって、いわゆるテリトリー主義ですから、新宿に住んでたら新宿の断酒会（に行く）。僕は新宿だから新宿の断酒会（に行くことになった）。会場は忘れもしない、神楽坂の赤城神社っていう古い神社です。赤城神社の社務所です。畳ですよ。行ったら 20 人ぐらいいまして。「今日はね、非常に先行き楽しみ（な）方が入ってまいりました」って司会者が芝居気たっぷり（に）言うわけですよ。

（断酒会の）ファーストインプレッションというのは「ここは責められない場所だ」と（いうこと）。要するに、責められない、叱責されない場所だと。もう（自分の）周りは叱責だらけだから。会社も、上司から同僚から、家庭はもちろん（叱責ばかり。しかし、）ここ（断酒会）はそういう意味では、俺は責められない場所なんだろうなっていうのは、腹の中でありました。

それから 2 つ目は（会員には）自営の人が多かった。僕は一応大きな会社のサラリーマンだ。ですから、ちょっと生意気だった。（他の会員は）八百屋とかね、そういう人だから、靴の底減らして（断酒会の例会に出席するために）歩く（ことが大事だと言われた）。それから軍隊帰りの人、年寄りが多かった。気合で、気合で（断酒は）やるんだと。やめる気さえありゃ必ず（酒は）止め（られ）ると。火でも水でも、水ん中でも行ってこいみたいな感じが多かったような気がします。（それ）で、「君もなんか、いろいろなんか大きな会社にいるらしいけど、でかい会社のね、ネクタイ締めたやつは結構駄目なんだ。能書きは言うけど、実践的に見ると駄目なんだ」（と言われる）。

確かにそうなんです。（会社員には決められた）仕事があるからね。自営の人は、ある意味じゃ、時間やりくりできるけど、われわれ（会社員は）やっぱり 6 時、7 時（まで会社に）いなきゃならない。だからそれもあって、いろいろ面白い話出ましたよ、学校の先生は、まず（依存症は）治ったやつはいないとか（笑）。学校の先生、学者は駄目だなと。新宿（断酒会）っていうのはリーダーが自営の人だったから、傾向としてはね、良い悪い（は）別にして、そういうカラーだったんです。だけども、今言ったようにすごく、ホッとはできました。いつももう（飲酒癖のために）周り（に）頭下げて謝って歩いてたじゃないですか。（そういうことは断酒会では）なかったですね。それと非常にやっぱり、家族の奥さん方が、酸いも甘いもかみ分けて優しかった。

東京の伝統

岡：奥さんも入れて 20 人（なんですね）。奥さんが一緒に（会に）来てたんですか。

立木：そういうことです。結構、昔は全員じゃないですけど（妻帯者が多かった。いまは）いろんな理由で単身者になっちゃって、生活保護もらって働いてないというのも、だいぶ増えてきたでしょ、いい悪い抜きにして。当時、東京断酒の場合は、昼間は労働、働くと。自営だろうがサラリーマン（だろうが）めいっぱい働く。で、家族を養う。（それ）で、飲みたい時間帯に例会に行く。逆に言うとね、当時、失業したりあんまり働かなかったり（する人はいなかった）。あるいは生活保護の受給者（は）会員で（は）いなかった。後になって生活保護（の受給）者がうんと出てきて。（そのようなことは）ついこないだ（始まったこと）ですよ。10-15 年ぐらい前までは、生活保護もらってる人は、会の役員にしないって（いう）不文律があった。会長にしない、どんな立派な男でも。だからこの伝統はね、東京の伝統なんです。労働する、酒やめたらまず働く。で、家族を養う。で、飲みたい時間帯に（飲まないで）乗り越える。

だからどうしても、サラリーマン中心の思想なんですね。自営もいましたけど。やっぱりリーダー（に）サラリーマンが多く、全体で見ると東京断酒のトップのほうは、みんなサラリーマンですから。そのカラーが、B（地域）の断酒会と決定的に違うんですよ。B（地域）は、行政と医療と断酒会が、もう三位一体でかなり歴史があって伝統があって実績がありますから。だから B（地域）は（当時は）会員（の）3 分の 1 は生保（の受給者）ですよ。良い悪いは別にして、そういう伝統なんです。行政に食い込んできたんです。東京はそれ絶対やらなかった。むしろ、われわれの先輩たちは「病院の OB 会には行くな」。それから「行政から金もらうな。ひも付きになるから。フリーハンドでできなくなる」（と言っていた）。病院の OB 会（も）いいけど、病院の先生（の話を）聞いて治ったやつは（いない）。（断酒会の）例会よりも病院の先生の講演会なんかに行って、治った試しはないっていうのが（話として）飛んでましたから。

また実際そういうところ（講演会ばかり）行くやつもおったんですよ。結局、地味な例会

に行くの、ばかばかしいじゃないですか。病院の先生の高度な（話が）しょっちゅう講演会（で）やってましたから。（その講演会に）行くんですよ、（そう）したら例会に行かない。いわゆる「頭でっかち」になって（再飲酒で）ひっくり返る。ティピカルな、典型的な役員が、ひっくり返るわけです[4]。だから古いタカ派の人たちはね、「行政から金もらうな」って（言っていた）。必ず（行政から）縛り掛けられるから。

だから、とにかく断酒会オンリーだったんですよ、東京の伝統は。あの有名な全断連の大野徹理事長[5]。この人、ご承知でしょうけど、○○海上火災のエリートサラリーマンですよ、東大出て。あの人が（東京断酒新生会の）トップだったわけですよ。それから、あの人の子分でやっぱり○○という（人も）東大で。みんながみんな東大じゃないですよ。でも、やっぱりその系統が多かったんですね。

ある医師の働きかけ

立木：（そこに）風穴開けたのが（医師の）C 先生ですね。いいことですね。僕、入会して（から）、この思想が C さん（から）出てくるまで 10 年ぐらいすかね。風穴開けたのは何遍も言うように、C 医師です。院内例会の患者を断酒会に連れてきたのは、あの人なんです。黒船が来たみたいなもんですよ。だってサラリーマンで、昼はピシッとしてネクタイ締めてるの（が）集まって（いるなかに）、よれよれの院内患者が来るわけですから。中にはうっすら飲んでるやつもいる。で、C さんが「おまえら自分さえ良きゃいいのか！」って言い方で、殴り込みかけてきて。ええ。大した人だったですよ。ところが狭い会場で 30 ぐらいの座布団しかないんですよ。（そこに新しく）10 人来るでしょう。で（新しく来た人は、会場費）を払わない。C さんの（意向）で（院内患者からは会場費を）取るなと。で、やっぱ（り、入院患者のなかには）おかしなやつが多いからね。だから、ものすごく（会員が）拒否反応起こして、一回（入院患者の出席を）断ったことあんですよ。（会場費というのは）要するにお賽銭[6]です。あれ（すら、入院患者は）払えないんですから。（そういう状況で）C さんが突破口（を作って）、憎まれ役（を）買って（入院患者を例会に連れてきた）。（それでも断酒会は）長い間（病院から来た人を）異端視扱いしてたし、邪魔者扱いして（いた）。

ただ、やっぱり（○○病院で）3 カ月のプログラム（を）終えて、社会復帰して会社に復帰して、立派になった会員がどんどん出てきた。だから（入院）患者はね、（酒を断ったばかりの）ビギナーはこういう連中だけど、（いずれ）われわれと一緒になるんだなっていうのが（わかってきた）。今（○○病院出身者）に（断酒会の）幹部（は）多いですよ。「名門○○」っていうことで。役（員）じゃなくったって（断酒会の）中堅（に）は（○○病院出身者が）多いですから。

断酒会の「往診」

岡：立木さんが入られたころの断酒会って、どんな雰囲気だったんですか。

立木：体験主義。断酒体験主義。もっと言えば、断酒歴の古い人が、大手を振って歩いてた時期ですね。それから当時の東京断酒はね、「往診」するんです。家まで行って励ます。これ今できないことですから。例えば「飲んじゃいました」と（聞くと、現在の地域断酒会の会長に相当する）支部長は、全員じゃないです（けど）、家に行くんです、「往診」って。

もう（今は）そういう思想はない。「断酒会で助かりたかったら断酒会に来い」（という考え方）ですから。そういう意味では非常にドライになった。いい意味での情実がなくなった。それから物理的に、会員が今より少なかったですから。ネーミングが断酒会になる前は支部でした。東京断酒新宿支部とか。だからリーダーは支部長だった。（でも）ある時期ね、（支部から）会にし（た）。なぜかというと、これ（は）行政との関係があって、東京断酒新宿支部の人が、新宿の公民館借り行ったら貸してくれなかった。「東京断酒（の名義で）で借りなさい、都に行きなさい」（という回答）なんだ。そういう行政区が増えたんです。これはかなわんっていうんで、やむを得ず東京断酒（の支部が、それぞれ新宿断酒会等、独立した名称になった）。だから当時は「会長」と（言わずに）「支部長」だった。

（ところで）どういう雰囲気だったっていうと、何遍も言うように、東京断酒は何のために酒やめてるかっていうと、働くこと。そのもらった報酬によって家族を養うこと。で、例会にはできるだけ多く出ること、何があっても。それは「一番大事な部分だから（例会に）出ろ」って。そういう意味で「（例会に）出ろ、出ろ」って言われたんです。「そうじゃないと働けないし、養えないぞ」っていう（考え方）が、後ろにあるわけ。これはね、逆に言うと、労働してない人あるいは失業した人（には）居心地悪かったと思いますよ。それから「家族で断酒会に出るんだ」っていうのが、非常に教条的なんですよ。かなり強かった。今は（とちがって）「価値観の多様化」なんて甘ったるい言葉はなかった。

だから昔はそういう意味の教条主義があって「例会に出ろ」って、今よりものすごいうるさかった、先輩（たちが）。なぜかっていうと、労働できなくなるから、飲んだら。家族を養えなくなるから「出ろ」ってことですね。やっぱり昔はそういう意味じゃ、上意下達でした。上から命令があって（それに従うという感じ）。これ時代（の変化）ですよ。（今では）いわゆるマンツーマンの個人関係が非常に希薄になったんじゃないですか。

こういう例がありますよ。シアナマイドっていう（抗酒剤）は、何だかんだいっても酒やめる有力な武器ですから。○○断酒会で（後で）副会長やった（D さん）、この先輩が（酒を）やめらんない。（しかも）病院へ行かない。（だから）薬（抗酒剤）を飲みなさいと E 先輩からも言われて（ね）。「あんた、薬飲まないと（酒を）やめらんない（よ）」（と言われて）で、結局、D さん、毎日 7 時ごろ出勤する（というときに）、E（先輩）の家へ電話して「今、抗酒剤を飲み終わりました」って（報告する）。毎日（E さんに）電話してから（会社に）出て（いく）。

これもやっぱり一種の個別コミュニケーションですよ。奥さんが（E さんに）頼んだらしい。もうなんか（それを）2 年ぐらい続けたって言ってましたよ。もう（D さん、後に）立派な人になって、役員（にも）なったけど、「ただ今、D、抗酒剤を！」（飲みましたと E さんに電話で毎日報告していた）（笑）。（自宅に）行かなくても、その手のやつ（つながり）が随分ありました。いつの間にかその風習がなくなったっていうのは、個人間のコミュニケーションが、だんだん希薄に（なってきたということ）。

（いまの社会では）いろんな物事みんなそうでしょ。断酒会もその流れです。断酒会はいろんな要素で会員減ってるんだけど、もうそういう先輩がいなくなったっていうことですよね。それ、いい意味で（は）合理主義だし。断酒会っていうセーフティーネット（として）例会っての（が）あるんだから、そこへ来いと。

あの（有名な断酒会会長の）F さんもね、両親が早く死んで、いろんな苦労して、散々精神病院に入院して。この F ってのは、やっぱり一種のカリスマでした。話術の名人で、座談の名手でね。この人が（支部長の）〇〇支部（ですが）一番会員（が）多かったんです。やっぱり、個別コミュニケーションで会員（数）が落ちなかった。

彼の場合は、黙って車で（家にくる）。（断酒会の）仲間から、立木（断酒会の会員）が飲んだという話、聞いてるわけですよ。すると何にも言わないで、いきなりね、車で乗り付けて、何にも言わないで（家に）入ってきて、行儀悪いからね、30 分ぐらい勝手に横になって、で、一言も「飲んだの？」って言わないんだって。で（しばらくたったら）「悪かった、またな」って帰って行くんだって。それのほうが、なんか飲んだほうは気持ちが悪くって。何にも言わなかったんだって。で、（仮に）言えば「ばか話」（しかしない）。全然そのこと（酒を飲んだこと）に触れない。「あした頑張れよ」とか、「これから、まだ（酒を）止めら（れる）」（とか）、そんな一言も言わない。ただ来て勝手にごろっと横になってね。「下町（育ち）ですから」って、「なんか、せんべいかなんかねえのか」とか、奥さんに言って。それで 30 分ぐらいい（る）。それ実際やられた人から僕、聞いた（ことがある）。「後でかえってね、説教されるより気持ち悪くてね、支部長、俺が飲んだっての知ってるのかな」みたいな（ことを言っていた）。で、心配だから例会に行って（笑）。それから、あの人の「夜回り」っての有名になった。飲む（夜の）時間に（自宅に）行くんだよね、（その人が）例会来ないと。そのころは絶対、何も言わなかったらしいですよ。「飲んだんだってな」とか、「頑張れよ」とか、一言も言わないで、ただごろっと横になって帰る。そういうことをやる人がいなくなったってことですよ。

断酒会の事務局

岡：理事会とか、そこら辺の雰囲気はどうでしたかね。

立木：東京断酒に入会した時ですよ、今から45年前の東京断酒の組織体制、いわゆる組織体としての断酒会は、事務局絡みであったと。事務局長、なかなかのすごい人でGってい（います）。〇区（に）〇〇坂っていう坂があるんです。（そこの）造り酒屋の息子だったんですよ、事務局長（が）。で、〇〇坂の上に〇〇亭があって、これが古い家でね。ここに東京断酒新生会事務局って看板（を）出してた。この人がやっぱり一種のカリスマで、とにかく何十年も（東京断酒新生会の）事務局長やって。今みたいに、事務所があってパソコンでっていうことは（なくて）手書きの時代ですから、結局、人出が要る。非常に悪い言葉（で）言うと、G事務局長の「私兵」が集まってたんです。「私兵」、言葉悪いですけど、もう肝胆相照らす子分なんですよね。この人たちが、イベントを担当した。当時のイベントだから組織として事務局中心。事務局（は）また、それぐらいの人数だったですからね。

岡：会長さんはまた別にいたんですね。

立木：いましたけど、会長連はみんなもう断酒（する）だけですから（組織的なことはしない）。会長会ってのもなかった。組織としてはね、理事連絡会ってのがあった。法人格が当時ないわけですから、任意団体の理事連絡会ですから、理事でも、いわゆる民法に書いてある理事じゃないんですね。ただ理事と呼んで、1支部から4名の理事が出る。（支部が）25あったから100名以上出て（いた）。だからね、名前だけ理事と呼んでた。理事連絡会で（あって）理事会じゃないです。毎月、基本的には事務局発の事務連絡会（があります）。まだ定款もろくなもんなかったんですよ、45年前。ただ慣行的に支部長は理事でなきゃならない。理事じゃない支部長っていなかったです。その他に1支部4名（を理事として出すわけ）だから、支部長1人、あと3名は（各断酒会の）顔役みたいなのが出てきたんですね。全支部が（理事を）4名全部出したわけじゃないけど、上限が4名ですから。だからいつも80人ぐらい集まる。で、主力は事務連絡。それから各会でなんかあれば報告してくれ（と）。

岡：場所はどこで集まったんです？

立木：八丁堀の東京都勤労福祉会館。ここはもう30年使わしてもらったんです。本部例会もあそこでした、30年（間）。今、更地になっちゃった。石原慎太郎（都知事）さんがつぶしちゃったんです。だから僕らは、もう入会した時も本部例会は、あの酒なし忘年会も全部、東京都の勤労福祉会館のホールです。定員が400くらいですかね。あそこがもう母体になってる。理事連絡会も90名ぐらい入る会議室。そこで毎月やってた。理事連絡会っていうのが、常設の会議です。で、今言ったように理事連絡会を動かしてたのは事務局。（その他に）総会ってのはありましたけど。年に1回。本当にしゃんしゃんしゃんで（終わる）。理事連絡会があって、常設の会合はそれだけ。

酒なし忘年会

立木：あとは、最大のイベントは「酒なし忘年会」[7]。一番会員が動員される、集まる、これはもう東京断酒としては、最大の行事だった。ハイキングなんか個別に各地域でやってたけど、本部が行う常設（のイベント）は、酒なし忘年会が最大のイベントで、それから毎月やる本部例会。それから毎月やる事務連絡会的な理事連絡会。この 3 つが常設。これが長い間続いたんです。僕ら若かったから、これじゃあまりにも面白くないというか、酒なし忘年会で「五人男」ばっかりやったって。ちょっと物足りなかったんでさ。

あれ大野さん（理事長）ですよ、考え出したの。大野さんが考え出して「白浪五人男」を「酒乱止み五人男」（とした）[8]。大野さんです、ネーミングしたの。あの人はなかなかシャレが好きだった。大野さんは朝日新聞にかなり友人がいたらしいんで、だから酒なし忘年会で新聞社に随分 PR して（観客も）来たんですよ。朝日新聞に大々的に載ったらしい。大野さんの手腕も大したもんだった。物珍しさで市民が集まってきた。

あれ（五人男）に出るやつは必ず酒がやめられるっていうジンクスでね。かなり中堅のやつが出てきました。（断酒歴）1 ～ 2 年じゃ（再飲酒の危険性があって）危ないから。今はもう逆に、誰も（五人男を）やらないすよ。幹事の○○なんかが、もうひいひい言いながら、無理無体に、やって（くれ）、やらないかと（誘っているが、なかなか、やる人がいない）、昔は（会員のほうから）「やらしてくれ」って（言う人が）いたんですよ、中堅で。必ず（酒が）やめられるっていうジンクスもあって。（断酒歴）1 ～ 2 年じゃ危なくって、稽古中にもう消えちゃう。稽古中に飲んだやつが何人かいるんです。困りますよ、五人男の役のやつが飲んで消えちゃって。飲んだらもう、そんなもんやりませんから。昔はね、ちょっと（断酒の）出来上がった、（断酒歴）5 年から 10 年ぐらいのやつがやると面白かったですよ。

だけど、今、考えたら汗顔の至りだけど、なんか僕（そういう活動に）物足りなくってね。（当時の会長の）H さんに言ったんですよ。「なんかもうちょっと、会員相手に酒害相談とか研修会とかやりませんか」って。H さんはベテランで、今になると（H さんの言っていることは）僕分かるんだけど、研修会とか討論会とかやったら、アル中ってカッカきてね、反対意見（を聞いても）耳にしないから、ケンカになって飲んじゃうんです。H さん、いくらでも（そういう）犠牲者（を）見てきたわけで。ご承知のように（断酒会の会員は）かなり我が強い。そういう意味では、人の言うことを聞けなくて衝突するんですよ。討論会なんか大変ですよ、ケンカになっちゃう。「この野郎、ばか野郎！」って。それだけならいいけど（断酒会を）やめたくなるんです。H さんはね、それ（を）長い間見てきてるんですよ。だから「あんまり火が発火するようなイベントは、やらないほうがいいよ」と。（でも）「それでは全然進歩がないじゃないですか」って（いうのが、僕のような）若手の（意見で）ね。

（それで若手で）本部との対話（を）したら、やっぱ（り）駄目だった、こんなに（めちゃくちゃに）なっちゃって大変（だった）。「新入会員にいかに対処すべき」とか、「本部に物申す」とか（そういう話題を）H さん嫌がってね、必ず熱くなるから、犠牲者（が）出るから。「立

木さん、これ（断酒会）は会社じゃないんだから、（そういう話題は）やめようよ」って。僕は若気の至りでね、物足りなかったんですよ、忘年会じゃ。歌ったり飛んだり跳ねたりするの、つまんなかったし、僕自身あんまりああいう芸好きじゃないから。本当にね、H さんから聞いたのは「発火点（に達する）、点火するようなことは、他（の会）ならいいけど、すごくある意味では（断酒会会員は）脆弱だから、われわれ（は）、カッカカッカして犠牲者（が出てしまう）。要するに、飲まないまでも「面白くねえ、この野郎！」で（断酒会を）やめちゃうわけですから、決して建設的なものにならない。

ただ H さんの言うことを、僕、納得できなくてね。これで 5 年、10 年（たっても）まだ「五人男」やる気かと、東京断酒（新生会）は発展性ないじゃないかと。だけど、これ（は）やっぱり（僕には断酒の）キャリアがなかったんですね。要するに（僕には）断酒会の「ちゃんこの味」がしみてなかった。

（会員は）ものすごく、なんでこんなにこだわるのかなと思うぐらい（活動に）こだわるんです。ものすごく断酒活動に熱心で、非常にシニカルな言い方だけど、（そういう会員には）断酒会しかないんですよ。（一方で）僕たち（サラリーマンには）仕事（があ）ったでしょ、会社の役もあったでしょ。そんな偉くなるっていうんじゃなくって（も）、要するに 1 つのポジショニングがあったわけですよ、業界の。（それに対して）断酒会しかない人ってのは、やっぱり（断酒会に）夢中になりますから衝突するんです。同じ衝突でも、なんでこんなわけの分からない（くらい）熱くなるんだろうってのは、もう（その人たちには）断酒会オンリーなんですね。だから、そこで違う意見が出ると、やっぱり自分の存立基盤もなくなるわけですから。

本部例会、例会、懇談会

立木：だけどね、僕らみたいなヤツだけじゃ、やっぱり断酒会ってね、そんなカッコのいいもんじゃないですから。やっぱり誰かが早く（例会に）来てね。こっちが仕事してる時間に早く来て、本部例会の時は。自分の時間つくってきて、本部の会場の鍵で開けて、昔、お茶出してましたから、女の人に頼んでお茶のやかんにお湯入れて、そういう人間がいないと、やっぱり（断酒会は）駄目だっていうことも分かりました。

岡：本部例会でお茶を入れたんですか。

立木：ええ。白菊婦人会っていう（会）が当番でやったんですよ。今でいう家族会ですよ。本部例会は白菊がお茶入れてたころは、せいぜい集ま（るのは）考えたら 90 名ぐらいですかね。90 か 100 ぐらい。会員（は）もっと多いけど、集まりませんから。

岡：東京断酒（新生）会っていうと、例会とは別にまた懇談会があって。

立木：断酒会の正規の日程表があるでしょ[9]。あれは公式のもんでオフィシャルなもんですよ。あれは事務局で作るんです。1 日は例えばどこの例会、それから第 1 例会、第 2 例会。本来は、

東京断酒の例会ってのは、昔は（地域で開かれる）例会（と全体で集まる）本例会（だけ）。ところが（例会に）集まり過ぎるんで、100 人超えるんで、第 2 例会ってのセパレイトしようと。そうすると散らばるから。で、第 2 例会ってできたんですよ。その後、家族会ができて。これはもう他の支部（の会員が）来てもらっちゃ困るけど（という会です）。誰が飲んだとかも（言える）内輪の（会で）、外部の人（を）入れない家族会ですね[10]。

それから、懇談会。懇談会と例会の区別（は）ありません。これは他の（支部の）会員が来てもいいんです。だから懇談会とか何とかって、やたら（集会が）増えてきたのは、できるだけ毎日ミーティングをやろうと、形（を）変え（た結果です）。例会（を）第 1 例会、第（2）例会と呼ぶようになったのは 1 カ所に集中（しすぎる）から。人気のあるとこ（例会に）は、もうキャパがないんですよ、教室の。だから分けたんです。だから、ちっちゃいとこ（断酒会）は、第 1 だろうが第 2 だろうが 20 名しか来ないとか、本来は分ける意味なかったけど、制度として第 1、第 2 とネーミングして、各会から日程（を）提出させて、まとめた。ところが、それでも毎日は（例会は）やってないんですよ[11]。だからだんだん（集会を）増やしていこうということで、懇談会を（始めた）。

今言ったように家族会っていうのは基本的には他支部（の会員）は入れないんですけど、懇談会は自由です。だから A 懇談会、B 懇談会、C 懇談会、D 懇談会と、○○（断酒会）なんか今もそういう呼び方してますよ。だけどそれはそれぞれ（の会）が、司会者（を）つくってやらなきゃいけないから、なかなか（運営が）大変なんです、4 つも懇談会が、正規のもの以外あると。（それでもそれを行うのは）毎日できるだけ例会を（開くために）みんなのために（例会を）増やそう（という結果なんです）。

その（他）同好会みたいのがありまして、日程表にも載らない。例えば、○○連合みたいな感じで。例えば、○○、○○、○○（が合わさった連合）だったかな。日程表（に）はないでしょ。これはなぜ○○と○○と○○が一緒になったかというと、たまたま（住んでいる）地区が一緒で会長（どうし）が仲がいいから、気が合うから。だからわれわれ（で）この○○連合つくろうかと。こういう程度のもんですね。で、自分らで会場（を）押さえて、持ち回りで（例会を）やってんすよね。だからこれが公式の第 1 例会、第 2 例会と（日程を）ぶつけるのはあまり好ましくない。そっち（へ、会員が）行っちゃうわけですから。本来は、公式の例会に行ってくれっていうのが筋ですから。だからある意味じゃ（そういう会は）分派行動だからね。これで揉めたこともあります。だって例会やってるのに、この○○連合の会がぶつかっちゃったら、やっぱりそっち（連合の会へ）行く人間が多いわけですから。

岡：雰囲気は、やはりその公式じゃない（例会の）ほうが（やわらかいのですか）。

立木：仲良しクラブですよ。例会には違いないけど仲良しクラブです。逆に言うと、例えばですよ、○○の会は会長（が）気に食わないから行かねえ、俺らだけで集まろうみたいな（ことだから）あんまり（断酒会としては）健全じゃないです。だって公式の行事がある日に（その例会を）やるんだから。それで（その会で）釣り（に）行ったりハイキング（に）行った

りしてるんです。だから仲良しクラブですよ。これを主導したのが（○○断酒会の○○で）彼は、やっぱり遊びが好きで、遊びが好きってのはハイキングしたり釣りしたり、芋煮会をやったり、好きなんです。自営ですから大きな釜があって、鍋があって。まあそれで（酒害が）治るやつもいますけどね。でも（断酒の）王道じゃないですよね。そういう分派行動取るのもいるんですよ。（それは）何となく体制側が面白くなかったり（します）。

岡：（ところで）体験主義と最初おっしゃったけど、やっぱり体験談を語るということは（断酒会の）最初っからそうだったってことなんですか。

立木：体験ってのは、断酒歴の体験（ですね）。断酒歴（を）長くするには、こうしろとか、それから、いかに断酒の苦しさを克服した（かという）体験。それは飲酒体験じゃないんですよ。（それは）断酒体験[12]。もっと言えば「俺はこうやって（酒を）止めてきたんだ。だからおまえ、おまえらも！」って言うんですよ。それ（には、会員は）やっぱりかなり抵抗があるんですよ。（断酒体験は）十人十色ですからね。ただリーダーたちはみんなそう（断酒体験を）言ってましたね。だから（自分が言うのが）唯一無二の（断酒の）方法だというカラーが強過ぎましたね。自分の体験を教えるわけですから。それこそ（断酒の）やり方（は）いろいろあるわけですけど、「俺はこうやってきた！」と。すごく断酒歴の古い先輩の話っていうのは、やっぱり聞かなきゃいかんからね。そういうこと言う人っていうのは、それこそ価値観の多様化を認めない人ですから。

全国大会

立木：よく（全日本断酒連盟の）全国大会なんてあったじゃないですか。持ち回りで（いろいろな）都道府県（で行う）全断連の全国（大会）。「あすこに行くやつは例会（は）回んない」とかね（言う人がいる）。全国大会（は）沖縄や北海道でやるわけですから、「その金があったら毎日例会（を）回る交通費にしろ」（という主張）ですね。

どういうわけだかね、全国大会（に）行く人って（地域の）例会（を）回んなかった。回んないだけならいいけど、飲んじゃうんですね、基礎訓練してないから。で、その人たち、これも分かる気がするんだけど、石川県の人と会ったり、四国から（来た人と）知り合って、愛媛みかんもらってお返しに何とかっていう、こういう交流なんです。全国大会の楽しみはそれですから。だってやっぱり3,000人も集まるんだから、そこで「やあやあ、また会ったな」と、毎回来てると仲良くなるじゃないですか。東京の人間と、それから例えば、名古屋の人間と、高知の人間、やっぱり仲良くなる。だけど、どうも例会（を）一生懸命回るっていうよりも、それ楽しみに1年間金ためて、旅費ためて（全国大会に行く人は）やっぱりあんまり（地域の）例会（出席）に熱心じゃないんだ。だから、体験主義者のタカ派の人は「あんなとこへ行く金あったら、毎日回る交通費にしとけ」と（言う）。極端な人（は）「（全国大会には）行っちゃいかん」って言う。確かに（全国大会に出席した）帰りに飲んじゃったってのはいるんですよ。ていうのは、全国大会ってのは1日だけですよね、日曜日。ところが「まあ、うちへ1泊してけや」と（誘

われる)。で、家（に）泊めて（もらう）わけですよ。その帰りに飲んじゃったやつがいたんですよね。だからそういうの（を）体験主義者のタカ派（が）見てるわけです。「あの野郎、何のために（全国大会に）行ったんだ、金かけて飲んじゃった」と。

やっぱり、ちょっと（全国大会に行くと気分が）高揚するわけですよ。断酒会ってあんまり高揚すると危ないんですよ。生意気な言い方するけど、（断酒会の人たちは）お祭り好きですから。お祭りであんまり興奮すると駄目なんです。ちょっと言い方悪いけど、すごくお祭り騒ぎが好きな人種ですから、ほとんどの人は「おみこし」（を）担いでますから。僕は、かつがない。ああいうの嫌いです。（でも他の人は）お祭りが好きで、騒ぎが好きで、行楽が好きで。だから全国大会ってのは少なくとも 3,000 人のパワーで、それなりに、いい意味でエネルギーもらって､それで知り合いが（でき）て「うちへ泊まってけや」と。（○○県）の人だったら上がったばっかりのね、魚をこうして（持って)、そいで 1 日遅れで仲間と外れて帰って、飲んじゃうわけですね。

全国大会秘話もあるんですよ。あんまりこれ言っちゃまずいけど、帰りに飲んじゃうんですよ、それはもう一種の旅行気分で。本来は研修（なん）だけどね、やっぱり（1 年ぶりに会う人が）懐かしいんですよ。こないだ送ってもらったビワうまかったぞ、送ってもらったリンゴうまかったぞって、（そう）したら東京のお菓子送ったり、田舎の人（は）それ好きですから。楽しい旅行ってのはね、酒（が）付きもの。気を付けないといけないですね。

語るのは、断酒体験か、飲酒体験か

岡：僕、すごく意外だったのは、初め断酒会に行き始めた時に、飲んで失敗した話がすごく多かったような気がしたんで、（酒を）やめてからの話もしてもいいんじゃないかなと思ってたんですけど。

立木：うん、それは何人かの強面のタカ派のリーダー（が断酒体験を話すわけ）で。だからって（他の人は）みんな（断酒の）キャリアがないからその話できない。そうするとやっぱり（飲酒）体験。（一方で）やっぱり（飲酒）体験談言わないと、怒られましたよ。僕、散々しゃべったら、○○さんっていう先輩の奥さんが「立木さん、話うまいわね。ニュースキャスターみたいね」って（言う)。皮肉なんですよ。○○さんって○○（断酒会）のドンがいたんですよ。タカ派で有名でね。「私のやり方に付いて来れない人は、どこでも行って（ください)」って言い放つ人だった。すごかったですよ。この奥さんが､また輪掛けてすごい人で､タカ派で､皮肉言われましたよ。「立木さん､話うまいわね､まるでニュースキャスターみたいで(すけど)､ここは断酒会（ですよ)」って言われてしまった。

岡：それは、どういうお話されたんですか。

立木：あのころは、ベトナム反戦でジェーン・フォンダというフォーク歌手が出てきて、日本にも来たんですよ。そんで、ウーマンパワーっていう言葉が生まれて。ウーマンパワーっ

ていうのは男女同権ですから、ああいう性差別が、だんだんこれからなくなってくようだと、海の向こうのベトナム反戦から波及し（て）こういう思想がきた、みたいなことを例会で言ったんですよ。自分のこと何も話（さずに）（笑）。だから（○○さんの奥さん）に言われなくったって、「ばか野郎」と思った人、いっぱいいたんじゃないですかね。（男女同権の思想が）日本にも来るようだと、それで（話が）終わっちゃったもんだからね。まあそのころは、僕ももう（断酒会で）役（を）持ってましたから、頭でっかちだなと（他の人は）思ったろうけど、ちょっとね、もう毎日毎日（例会に）行って、「ウンコたれたとか、しょんべんした」とか、そういうこと（を聞くのが）嫌になっちゃった。なんか、もうちょっと脳細胞が増えるような話ねえのかと思って。だから僕も随分、尊大だったんですよ。やっぱりね、30 年たたないと分かんないですよ、断酒会の味がしみる、断酒会の住人になるにはね。

僕みたいなやつで落伍してったの、いっぱいいるんだから。ドイツ語の医学書を原語で読んで、一杯（酒が）入ってて、例会来て読んだ（読み上げた）やつもいる。○○新聞の編集委員ですよ。「ああ、俺もこうだったのかな」と思って。ドイツ語の医学書を例会の時持ってきて。で（もう）一杯飲んでるんですよ。酒が入ってる。みんなびっくりしてね。ドイツ語を大学で長い間やってたみたいで、すごかったですよ。ドイツ語の医学書ですよ。（司会者から指名されて）当たったら、立ち上がって読むんですから。「きょう、ちょっとドイツ語の医学書持ってきたんで、ちょっと一節読みます」って。ところが飲んでるからね。怒って「つまみ出せ！」っていう人がいて。「ここ、そういうとこじゃないから」と。

だからね、おっしゃったように、逆に言うと、こういうのがいたから、やっぱり如何にして自分は断酒継続をしてきたかということを、先輩言いたかったんじゃないですか。それから、そういう人（先輩）たちってね、ものすごく例会回るんですよ。だから後から入ってきた（後輩な）のに「例会の周り方少ない！」（と怒られる）。だって、こっち（は）7 時ぐらいまで（会社の勤務があって、断酒会には）出れないじゃないですか。（そう言うと）「残業断ってでも来い」と。だからかなり一時期（断酒会が）嫌になりましたね。で、やっと残業断ってきたら、（例会で聞くのは）しょんべんした（だ）の、ふとん（で）寝小便したの話じゃないすか。

夫婦関係もね、もう離婚しようと思ったとか、酔っぱらって殴られたとかいう話で、はっきり言って物足りなかったですね。そのくせ、やっぱり（僕も）2-3 年、酒やめられなかった。先輩（はその姿を）見てたんですよ。うまいこと言うけど、こいつは（酒を）やめてない。（それが）分かるんですよ、先輩（には）。（というのは）やっぱりね、飲んだやつってのは（飲んだって）言えないから、やっぱり話題を他に振るんですよね。ベトナム反戦（の話をしたときは）僕、飲んでた時だから。だからさっきのドイツ語のあんちゃんみたいな（人は）もうお酒臭くってね。

だけど、ああいう人も救う場面がなかったのかなと思って。ああいう人がやめたら素晴らしいなとは思ったんですけど、いっぺんで（断酒会から）消えましたね。向こうは向こうでつまんないんでしょう、来ても。（今までにも）すごい人いましたよ。○○○○っていう（非常に有名な人）の娘婿が会員だったんですよ。（○○新聞の）政治部の（人だった）。あっと

いう間に（断酒会から）消えましたね。「そんなことは、みんな俺は分かってるから」って、（例会で指名されると）そういう発言して、みんなから白い目で見られて、「私、（断酒会に）入ったばっかりだけど、（みなさんが）言ってることは分かるからやめます。お酒は（自分で）やめられます」って。（でも）その（例会からの）帰り（道で）飲んじゃったっていう話でね。

だからね、そういう意味でやっぱり何だかんだ言っても 10 年、20 年、お酒をきちっとやめて例会回ってる人（の言葉は）最後はやっぱり重みが出てきますよ。それはもうインテリジェンスじゃないです。ここは酒やめるとこですから。ただ、その点じゃ僕も随分、忸怩（じくじ）たるものもある。内省し、新しい会員の酒害相談なんか乗ってると、自然にもう「理屈」と（か）無くなりますよ。だって新しい新入会員とか、これから入る人（から）相談受けて、そんな理論なんか話したって分かりゃしないんだから。やっぱりね、かつて先輩がやったように、できるだけ（例）会、多く出ましょうと。

断酒会の「タカ派」

岡：そのタカ派の話をもう少し、具体的（にしてください）。

立木：タカ派はね、幾つかの例だけど、例会中に白い歯見せちゃいけない、笑っちゃいけない、真剣にやれっていうことですよ。○○（断酒会）はどういうわけかタカ派が集まってた。だからあそこで「何でも（いいから）飲んだら飲んだって言え」っつってんのに、（体験談で）「飲んだ」なんて言ったら、集中攻撃（を受ける）。「あなた、だから例会の出方少ないと思った」とか。昔はね、ある人の発言に対して「言いっ放し聞きっ放し」じゃないんです。それから「体験談以外は話すな」。それから「例会は（通うことで）靴のかかとを減らせ」。

岡：その体験談というときには、飲んでた時の体験なのか、それとも飲んだ後の（酒を）やめた時の体験かっていう（疑問があるのですが）。

立木：ここでいう体験談は、「断酒会は体験談に始まり、体験談に終わる」っていう格言（でいうところの体験談。だから）これ全部、飲酒体験です。酒やめてからの断酒体験（は）断酒幸福論。これ、やっぱりウエイトとしてすごく小さいです。っていうのは、（そうじゃないと）啓発されないから、お互いが。やっぱり飲んで「ああ、あの人も俺と同じことやったのか」というのが、やっぱりシンパシー集める切り札ですから。「酒やめた！」ってのは、「いかに俺は断酒してきたか」と（いうことだけど）、これ（では）あんまり、これから（酒を止めようかどうかまだ）ふらふらしてる人（は）啓発されないです。やっぱり「俺もこうだったんだよ。俺も離婚して女房に逃げられたんだよ。俺も会社、首になったんだよ」という話で、「だけど（酒）やめてるよ」っていうのがシンパシー（を得られる）。だからもう「体験談」っつったら、（それは）飲酒体験（です）。（そう）じゃないと意味がないんです。（それに対して）断酒体験っていうのはもう、ある種の古い人たちの、悪く言えば自慢話だし、よく言えば後進に「やっぱり断酒会で一番価値の高いものは、断酒をいかに長く続ける（かな）んだぞ」っ

ていう到達点の話ですから。だけど、みんなで集まって励まし合ってやめるっていう（場合に話す）のは、飲酒体験（です）。そうじゃないとお互い響かない。

体験談に対する医師の意見

岡：体験談の内容（は）どうですかね。昔と今と比べて。

立木：僕は反対なんだけど、ある種のお医者さんが言い出した話で、体験談、例えば、「しょんべんした」「くそした」「首になった」「殴られた」、こういう話は、飲酒体験（だけど、それに）プラス、その時、おまえは、しらふになって、どういう心境だったかということも話せって、医者が言い出したんです。昔はもう体験談っつったら、やったことをうそ偽りなくそのまんま話せる。今（は）、心（を含めて）、その時、こういうことした時、おまえはどういう気がしたかということも話せっていう、ちょっと上方の（関西の）ほうの医者が言い出してるんです。僕は、これ（には）反対なんでね。（そんなふうに自分を）精神分析できる人って相当の人間ですから（普通はできない）。お医者さんっていうのは、専門家っていうのは専門家の世界しか知らないわけです。お医者さんっていうのは、やっぱりお医者さんの診察室の話しか基本的に分からないわけですから。

もうちょっと言うと、（専門家は）社会（のことを）みんな知ってるわけじゃないんですよ。先生は先生の医学の世界しか知らない。だからそういう人たちがね、いくら精神科医（からの立場）でも（例会で）体験談プラスそん時の心境も話さなきゃいかんって（言う）のは、僕はちょっといけないと思うんですね。（断酒会では）お酒をやめて間もない人たち（が）生々しい体験談を話す。昔は、もう（自分が飲んでいて）やったことを、言いっ放し聞きっ放しで（お互いに）聞いとく（ということ）で済んでた。ところが（そうではなくて）どういう心境で、例えば女房を殴り付けたかとか、そういうものも合わせて話して、反省してるかとか（を話せということでしょ）。かなり（断酒歴が長い）古い人に対してもそう（言うわけ）ですよ。つまり単一の、ああしたこうした（というだけ）の話で終わるなというわけですよ、体験談を。精神分析も、極端に言うと（それに）合わせて話しろと。（それを医者は）講演会で言ってるわけです。

（でも、それは）ちょっと違うなと思ってるんですよ。体験談で精神構造について話せってのは、悪くはないけど、理想論ですよ。やっぱり「体験談に終始する」っていったら、そっちへ全力割かないと。いや（精神分析が）できる人はいいですよ。その時なぜああしたかっていうのは、（例会で）みんなに開陳できるかっていうとできないでしょ。相当年数たったってできないですよ。僕、女房（を）蹴飛ばしたっていう時、それ反省したのはいつごろだとか言われたって（答えられない）ね。

つまり、そういうお医者さんって、断酒会の手法が古いと（言うんだ）。もう「しゃべりっ放し、聞きっ放しで、やったことだけ言えっていうんじゃ、今の若い人には通用しないぞ」と（言

うわけだ)。要するに若い人を狙ってるわけですから、若年の会員（の）少し耳目を集めさせるような手法取らないと、旧態依然じゃいけないよと（言うんだ)。(その理屈は）分かる（こと）は分かるんだけど。やっぱり断酒会そんな甘いもんじゃないですから。

だから、飛び込んできた患者を診察室で見て、指導して治療するのは先生方の役目だと思うんだよね。(そうではなくて）もう（断酒が）出来上がって何年もたって（いる人間が）集まって運営してる断酒会に、もう公益社団法人になってるところに「ああせい、こうせい」っていう（ことを）講演会で話すと、やっぱり（こちらは）影響（を）受けるわけですよ、全断連の理事もね。「断酒会（は)、例会も（やり方を）変えなきゃいけない」なんて言う先生がいるんですよ。「体験談オンリーじゃ若い人に飽きられるぞ」と（言うわけですね)。(でも）そうじゃないんですよね。断酒会ってそんな生易しいもんじゃない。

それからここ（断酒会）はね、やっぱり一種の修行の場、訓練の場ですから、やっぱり他に目向けたり逃げちゃいかんのです。純度をかなり保ってないとね。純度を保って、金じゃないけど 99.9 パーセントは体験談を話して啓発されるというところじゃないと、ここにプラチナ（を）入れたりなんたりしたら駄目ですよね。

昔、先生はご存じかな。アメリカの大リーグのヤンキースがめちゃくちゃに強いんで映画ができまして『くたばれ！ヤンキース』っていう有名な映画（があります)。これ（に）習って（医者の I）先生が「くたばれ断酒会」って冊子に書いたんですよ。病院の OB の雑誌に寄稿して。まあ、先生だから悪意はないですね。でも「くたばれ断酒会」の内容見ると、断酒会のピラミッド化はいかん、それから高齢化って（言われながら）やっぱり役職者の世代交代（が）できてないから「くたばれ断酒会」。「くたばれ断酒会」ってのは、そういうものを修正しなさいという意味（なんです)。I 先生って何回か（例会に）来てくれたんです。だから本音（は）分かってるけど、言い方が「くたばれ断酒会」。確かに、なんか向こうから（医者から）見るとやっぱり（断酒会は）運営面じゃね、会長、理事長がいて、常任理事がいて理事がいて、こういう層があるの（が）断酒会（なんだけど、それを）要するに平準化しろってわけです。みんな平等だと。(平等は）きれい事なんだけど、(層がある）運営の面は、しょうがないじゃないですかね。

岡：お医者さんで医学のアドバイスするんだったら分かるけどね。組織のアドバイスをするのはよく分からない。(組織については）全く素人だから。

立木：そうですよ、だから「何をおっしゃってるんですか」っていうことになる。(断酒会の）応援団だから仲良くはやってこうと思うけど、断酒会も全断連（で）でかい（組織）で、全国展開ですから、やっぱり（医者も患者を）自分の病院に取り込もうっていう部分もあるわけですから、これはしょうがないですよね、商売ですから。

「指針と規範」について

岡：「指針と規範」を作った経過のところを、全断連の新聞（で）見たら[13]、（その）きっかけとしては、お医者さんのアドバイスで「これ作ったほうがいい、AA に倣って作ったほうがいい」ということで（作ったと書いてありました）。

立木：そりゃそうです。

岡：（断酒会の）中から出てきたものというよりは . . . 。

立木：もちろんそうです。外圧で（作ったわけだ）。もともと断酒会の生みの親は AA ですから、だから古い先生はね、AA（には）規範があるから、それを（断酒会でも）作ったほうがいいよと言うんだけど。僕はね、また別の見方（を）持ってて。断酒会ってのはね、やっぱり一つのテーゼなり、基準なり規範、ことに明文化されたもので、あんまり縛っちゃいけないんですよ。運営のほうじゃないですよ。運営（に）はね、定款が要るけど、いわゆる断酒会の一つの断酒活動の中で、一つの基準、スタンダード持って、それが文章になって（それがいいかどうかわからない）。

なぜかっていうと、これ（僕が言うのも）生意気ですけど、僕の親父は、朝日新聞にいて、語学ができて、ジャパンクオータリーって年に 4 回、日本紹介の英文（を）出すセクションにいたんですけど、英語が少々できると。で、TBS が日本でブリタニカ日本版を作ろうということで、今から 30 年ぐらい前に英語使いを各界から（集めて）、うちの親父も朝日（新聞）経由で行ったんです。（それ）で、親父が、いくつか背負わされて、守備範囲を。その中に「性格」っての（が）あったんです。で、親父が言ったんだけど、「性格」を表現する形容詞（が）「仏頂面」とか、ああいうスラングも入れて、2 万語（も）あるんですって。だから、イギリスの辞典ってすごいな（と思った）。日本にだって「性格」を表す言葉ってのは、ものすごいあるんだそうです。逆に言うと「性格」って、それだけ多角的なものじゃないですか。ましてや、アルコールでおかしくなったやつが、一つの規範なんかで縛れるもんじゃないんですよ。極端に言えば、2 万通り形容されるのが性格ですから。そういうものを持った人間がね、一つの「べからず集」じゃ、絶対いけないから。だから、僕はそういう意味じゃ、なだ（いなだ）さん[14]の影響も受けて。あの人の講演（が）好きだから（僕は）聞いたんだけど。あの人も「絶対に横並びは駄目だ」って言うんですよ。「できるだけ、各断酒会のカラーは違ったほうがよろしい。だから断酒会の指導者は、できるだけキャラクターが違ったほうがいい。なぜなら下にいる、あるいは集まってる断酒会員って、それだけバラバラ、十人十色どころか百人十色だ」と。僕もその話聞いて、そうかなと。僕もね、はっきり言って定款が好きだった、縛るのが。だけど実際見てるとね、面白い話があるんですよ。いろいろやっぱり人間っていろんな性格があるから、一律で縛っちゃいけないんだなと。

会員を縛ってはいけない

立木：例えばね、ものすごい変な、変わった（人間が）亡くなりました。この人はね、当たり屋で食ってたの。当たり屋って知ってますか。（車に）当たって、それで保険金取るんですよ。だからこの辺しょっちゅう生傷の人で。（当たり屋）で金取って（酒を）飲んでた。この人が断酒会に（入って）、僕は（J がいる会の）支部長で、もう（J について）随分ほうぼうからクレーム（が）来た。もう型破りな人だったから。この人は、かばんにね、ワンカップとそれからロープ入れてた。それ見せるんですよ、例会場で。「何、君、してるんだ、やめろ、酒なんか」（と言われると）、「いや、俺これを飲んだら、これで首つるつもりでいつも持ち歩いて（いるんだ）」と。異常な人だった。で、この人はもうとにかく手に負えない人で。会長連がずらっと（例会の席では前のほうに）並んでるでしょ、東京の場合[15]。すると（会長の発言を）こう聞いててね。例えば K という会長がなんか（話すと、そのあとで）「K さん、あなた近々倒れますよ、飲みますよ。今の話（は）全然例会回ってない（人の）話だ」って（J は言う。J は）会員歴だけは古いんですよ。だから（会長たちは J を）嫌がってね、あの人がいると。（J は）みんなの前でもう思ったこと（を何でも）口に出す人ですから。

それから、会長で（あっても、例会の会場では、各支部の会長のために）会長席があるのに、やっぱり、いろいろ考えて（会長のための席ではなく）会員（のための）席（に）座ってる人（が）いる。（その会員席に座っている会長に向かって）「あなた、飲んだんじゃないか」と（J は言う）。（それを）みんなの前で言うんですよ。「あそこ（会長のための席に）座れないっていうのは、（酒を）飲んだんじゃないか」と（言う）。で、（言われた会長は）怒っちゃってさ、会長がもう二度と来ないどころか、夜、（J が所属している断酒会の支部長である）僕んとこ（に）クレームの電話が（来る）、J（のこと）何とかしろ（と言われる）。

当時（は）「さん付け」で呼ぶ、先輩、後輩をね。「君付け」じゃなくって、「さん付け」で呼びましょうっていう運動が（断酒会のなかで）あったんですよ。やっぱり確かに（会員どうしは）平等だから。いくら 30 年（酒を）やめてる人でも、きょう入ってきた人に対しては、「君」っつっちゃ（と呼んでは）いけないと（いうことになった）。「さん」って呼べ（という）。ところがね、あの（有名な会長の）F さんは、「J 君、J 君」って呼んでる。（ところが）（○○断酒会）のゴッドファーザーと（言われていた）○○さんっていう公認会計士が「J 君」って呼んだら、その場で「もう一遍言ってみろ！」（と怒った。F さんから「J 君」と呼ばれても怒らなかったのに）。だから、リーダーの人（から）「君」って呼ばれても怒らない（こともあるし、怒ることもある。これは）人（の）好き嫌いの話（なんだ）。なんであんたに「君」って呼ばれなきゃなんないんだって（嫌いな人に言われると怒る）。例会中でも（そういうことを）言うんですよ。だからもう、まいっちゃった。つまり、「さん」と呼ぼうとか、「君」と呼ぼうとか、あんまり（会員を）縛っちゃいけないんですよ。こういう人がいるんだから。

「指針（と規範）」（を使うのは）地方（の断酒会）に多いんです。どっちかっていうと。（地

方で）「指針と規範」の勉強会ってやってんですよ。で、「指針と規範」の勉強会に来ない人は村八分になるんです。その来ない人ってのは「指針と規範」が嫌い（なん）だ。押し付けとか、押し付け（られることが）嫌いな人だから（勉強会に）来ない。そうすると本来なら非常に価値のある「指針と規範」なんだけど、それがかえって仇（あだ）になって、これ（を）学ばないやつは、要するに「非国民」になっちゃうわけですよ。「非国民」って言われる人（も）悪いかもしれないけど、そういう人が実存してるわけですから、断酒会（には）。だから縛っちゃいけない。「指針と規範」はいいですよ。いいけど、あれを「錦の御旗」とか「黄門様の印籠」にしちゃいけない。ところが往々にして（それを）やりたがるんですよ。

だからね、これ、やっぱりリーダーの資質の問題になるけど「『指針と規範』を学ばなきゃ駄目だって簡単に言っちゃいけないですね。本来、価値のあるべきものが、逆にデメリットになってるわけだから。だから僕はなるべく緩やかな規範（がいいと思う）。（組織の運営について）ならいいですよ。公益社団法人って法律に書いてあるのは運営のほうですから。（しかし、）例会は、こうあるべしってのは絶対駄目ですよね。ある種の人は（そういう規範があっても、それに同意できる）主流派でいいだろうけど、必ずそれに反対する反対勢もいるわけですから。「指針と規範」はもう断酒会の財産だし、僕もそう思うけど、それから来るデメリットにも目向けなさいっていうこと（も大事なんですが、それは）分からない（人もいま）すね。（「指針と規範」に）夢中になってる。

○○（地域の名前）なんかすごいですよ。例会の前に（「指針と規範」を）一節ずつ読み上げ（る）。ああいうふうにやられると、やっぱり、あれ（「指針と規範」）が至上のものになりますから。だけど、あれじゃ同調しない部分がある（会員がいる）わけでしょ。「指針と規範」ってそれ自体、立派なものをね、悪いほうに（使ってはいけない）。これはだからもう使うほうの問題、リーダーの問題ですよね。

すごいですよ。一小節ずつ（「指針と規範」を）読んで。僕も全断連で地方行ったけど。すごいです。一礼してね。「指針と規範」（を）置いてあるんですよ。（それに向かって）一礼する。よく旗（を前にして）は一礼するでしょ（それと同じ）。僕は、あれもやめろっつってんだけど。よくあるじゃないですか、式年行事で旗はって、なんかうやうやしく一礼（する）。「そうじゃないんだ、ここはもっと人間の集まりなんだから」（と思うんですけど）。（でも）「指針と規範」を棚に置いてあって、（そこに）一礼するんです。

やっぱり断酒会っていうのは、お互いが決めた緩やかな（規範で十分）。お互い、やっぱり何も言わなくなったって、人の悪口言うのやめようとか、例会（に）出て（る）と分かるじゃないですか。

だからそういう緩やかな規範で（いい）。文章になって「（○○する）べからず」（という規範）になったら、これ、守らないやつは非国民ってなりますから。やっぱりそういう意味じゃ、明文化するっていうことは、よく（慎重に）考えないとね。

岡：「断酒の誓い」[16] とかはどうなんですか。

立木：「断酒の誓い」っていうのは「べからず集」じゃありませんから。「誓い」と「規範」と（は）違うと思いますね。

例会の進め方

岡：例会の進め方っていうのは、ずっと 40 年前ぐらいから、大体同じような感じですか。

立木：ええ。大体同じです。いや、そうでもないか。昔はね、新しい人から（発言者として）当てて（指名して）、最後は会長（が話す）。これ地方で（は）すごく評判悪いんです。会長（のための）席（を特別に）作ってるところ（断酒会）は、もうあんまりないんですよ。で、この構図はね。最近まで変わらなかった。ところが今 25 の断酒会があって（それぞれ）複数のミーティング持ってますけど、25 の断酒会の例会場で会長席持ってるっていうのは、25 のうち、もう 1 つか 2 つになりました。つまり会長席を廃止せよっていう声がもう 20 年ぐらい前から少しずつ出始めて。それは、地方（に）行って（そこの断酒会例会を）見てる人はもう、地方じゃ（会長席は）絶対ないですから。だから逆に言うと「東京はなんだ、会社みたいだ」みたいな言い方されて。それで、もう言わなくても会長席がなくなりました。今あるのは（○○断酒会だけ）ですよ。

だから例会の仕方も、そういう意味で会長席があって、最後に（会長が話す）というのはないけど、やっぱり新しい人から最後は古い人っていう（順番）は、昔と変わりませんね。

岡：（私が）たまたま○○（地方）のほうに行った時に、びっくりしたのが、（断酒会の例会に）行ったら集まってる人の半分ぐらいが（断酒会の）会員じゃない。会員が減ったといっても、会費を払わずに例会に出てる人は、結構いるんじゃないかな。

立木：（それは）あります。それ、困るんですよ。平成 4 年。だから今から 24 年前ですかね。850（名）東京断酒（新生会）に（会員が）いたんですよ。その時は、年間の新入会員が 168。でね、どういうわけだか（断酒会を）やめてく人（の人数）っていうのは、一定なんですよ。何年たっても、やめてく（人数）は一定の数なんです。変動があるのは新入会員の数なんです。（以前は）160 入ったのに、（今は）2 桁です。ひどいときは 80 くらいしか入んない。で、やめてく数が 160 ぐらいいますから。だから差し引きすると少しずつ（断酒会を）やめる人が勝って減って（い）く。

だから、どうやって会員増やすかっていうと、新入会員増やすってことですよね。で、なぜ新入会員が集まらないんだろうって何遍も研修会でやってんだけど、これはまあいろんなこと言うけど、断酒会に問題があるとか（言うけど）全部抽象的でエビデンスがないんですよ。それだったらやっぱり一番、言葉悪いけど、供給先の病院と仲良くなって（いくことが大事で）、「定着」[17] だなんてね、二の次三の次なんだからいう話を僕はしてるんですよ。

一日断酒は修行

岡：立木さんが（いつだったか、断酒会は）修行の場ですからねとおっしゃってましたけど、あれが、僕、なんかすごく（その）考え方が好きなん（です）

立木：そうですね。あんまり合理性（を）追求するようなものじゃないですから。40年も例会に出てね、しゃべること同じですから、体験談。これ、一種の修行で「道」ですよね。あんまり論理的に合理性でとかいう部分ありませんから。やっぱり「道」ですよ。哲学でもありません。断酒哲学って便宜的に考えてもいいけど。要するに40年同じ「道」やってるわけですから、同じ方法ですよ。「石の上にも3年」っていうぐらいだから。同じことを何十年も続けないと。40年も同じこと言って、どんどん目新しいこと言ってるわけじゃありませんから。

岡：リチャードさんがね[18]、断酒会の例会を見て、禅と似てると（言っていたのが）、すごく僕にとって衝撃的でね。そんなこと思い付きもしなくて。だから同じことの繰り返しの中で学んでいくという。

立木：そうです、そうです。だから到達点とかゴールとか目標とか、あんまりないんですよね。「今日一日の断酒」「一日断酒」っていうのはそうですから。だからやっぱり修行ですよね。禅だってそうでしょう。5年やって偉くなろうとかいう人いないわけで。だから禅にも似てますね。まあ、よく言われるんですよ。45年もやって飽きないなって。飽きない。飽きないんですよ。例会で同じ話してるっていうけど、少しずつ、自分も含めてだけど、成長の跡が話の中で少しずつ見える。

生成発展って言葉、僕好きで、生成って生が成るって（書く）。生成発展ってのはいいことだなと思って。聞いてると新しい人の話ってのは、生成が多いですよ。（例えば）「女房が笑った」とかね。非常に新鮮ですよ。かつてあったようなネタ、（例えば、布団のなかで）しょんべんしたとか何とかっていうのは、ちっとも進歩がないと思ったけど、今考えるとそうじゃないんですね。あれだけしょんべんした人が、こんな（に立派に）なったって話になるんです。

だから、断酒新生もそうだし、断酒生成だと思いますね。やっぱり例会に出ないと啓発されない。例会に行って全然思いもよらない言葉、はっとするような言葉（が）あるんですよ。だからね、やっぱり断酒会に行かないと。僕も例会（に出席する）数が少なくなったけど、これで（例会に）行かないと置いてけぼり食うんですよ。ただもう空虚な、書類だけの知識になっちゃって。いわゆる生身の断酒が味わえなくなる。電子レンジで加工した料理食うのと、捕れたての刺身（を）食う（のとは）全然違いますから。やっぱ捕れたての魚（を）食べるにはやっぱり浜辺に行かなきゃいかんし。海で上げたばっかりのね、サザエを焼いて食うんだったら、船の上で食わないかんし。

岡：（いま）生成とおっしゃったけど、成っていくっていうのが、なんかイメージ（としてぴったりとくる）。自分で（ステップを）上がるんじゃなくて、（おのずと）成っていくという（イメージ）。

立木：入道雲と一緒ですよ。入道雲って一瞬も同じ形してないでしょ。ただやっぱり高くいきますから。その意味じゃ、結局、仲間の話から学ぶ。学ぶっていうか、啓発されるんですよね。自分でこう思って考え出したっつうの、やっぱり駄目です。独り善がりですからね。仲間の話で、自分の考えとか修正されるんですよね。てのは、思いもよらぬ発言があるわけです。

だから僕、このごろでは一生懸命、体験談（を聴きながら）キーワードを腹ん中で探してんです。こないだ（の例会で）アメシスト[19]が話した（体験談）で「許す」という（キーワードがあった）。（その）アメシストが、とにかくキャリアウーマンで頑張るんすよね。会社で。（ただ）頑張れば頑張るほど、人を許容できなくなるっつうわけですよ。仕事でも、頑張れば頑張るほど自分に厳しかったから（人を）許容できない。断酒会でやっと「許す」っていう言葉を覚えました、（そう）したら随分楽になりましたってわけですよ。

（他の会員のことを）嫌なこと言う（人だ）なと思ったり、同性だ（といっても、）アメシストでも仲が悪い人いる。だけど、よくよく考えてみたら、みんな同じ船に乗ってる仲間だし、荒海から入江に入ってきて、ここ（断酒会）は静かなんで、そこがいがみ合ってもしょうがないなって、（人を）「許す」。「許す」って本当に腹の底からあの人のこと（を）許すとか、断酒会の組織（を）許すとか、会長を許すとか（になると）随分楽になりますよ。「私はこの1年断酒して『許す』っていう感覚が、少しずつ自分のものにな（って）『許す』と自分が楽になる」っていう言い方（を）して（いたアメシストがいた）。まだ（断酒歴が）2年ぐらいのアメシストで（したが、「許す」という）キーワード（があった）。（それを聴いて）やっぱり俺も許す力、あるのかなとか考え（た）。

（だから、例会で聴いていても）飽きないですよ。人（は、その話を）聞いてるとやっぱり変化してます。生成ですよ。生成って、万物生成するじゃないですか。だから必ずしも立派になったとかいう話じゃなくって。いい意味で、小さい部分だけど、やっぱりそれ（生成を）聞き逃さない。（体験談を）聞く力もやっぱり付けなきゃいけないと思いますよ。

謝辞

立木氏には長時間のインタビューにご協力をいただいたことに感謝し、また私の個人的な事情から論文執筆までに非常に長いブランクがあったことを陳謝したいと思います。また立木氏には、文字起こしの段階で内容をチェックいただきました。最終的な論文については、立木氏および東京新生断酒会理事長、生馬義久氏、東京断酒新生会事務局長、保坂昇氏にチェックしていただき、公刊についてのご了解を得ました。ただし、立木氏が語られたことは、立木氏個人のご経験、お考えであり、東京断酒新生会の総意に基づくものではありません。また原稿をまとめるにあたっては、断酒会研究に実績がある常葉大学講師、三好真人氏にご助言いただきました。皆様には深く感謝いたします。なお文中、誤植等が残っているとしたら、それは筆者（岡）の責任です。本研究はJSPS科研費16K04184および19K02197の助成を受けたものです。

（注）

1 東京断酒新生会自身は、たとえば 20 周年、30 周年記念集会を 1973 年、1983 年に開いているので、組織として独立したのは 1958 年でも、その組織の母体は断酒友の会にあると考えられている（東京断酒新生会 , 2008）。

2 ただ単にアルコール依存症者の研究対象を断酒会会員から募った研究を除く。

3 大橋らの研究（大橋・石井・石川 , 1977; 大橋・吉兼 , 1979）が東京での断酒会会員（東京断酒新生会会員だとは明記していない）の自計式の質問紙調査を行っていて、60％の回収率で 276 名の回答を得てるが、そこでは 50％の会員が 40 歳代、26％の会員が 50 歳代であり、60 歳代、70 歳代の会員はそれぞれ 4.7％、0.7％であった。立木氏の印象は、高齢の会員のほうが例会への出席が熱心だったことから来るのかもしれない。

4 再飲酒してしまうという意味。

5 全日本断酒連盟の初代理事長である。大野 (1977) を監修している。

6 わずかな金額だということ。たとえば、東京断酒新生会の本部例会は、現在でも 1 回の参加費は 100 円である。

7 正式な名称は「奥様（家族）に捧げる感謝の酒なし忘年会」。断酒会員やその家族が、舞台に立ち、体験談が語られるが、それに続いて、歌や踊り、合奏、寸劇等が披露される。そして最後の最大の演目が、後述する「酒乱止み五人男」である。残念ながら「酒なし忘年会」は、コロナ禍のため 2019 年 12 月 8 日、280 名の参加者を集めて第 52 回が開かれて以降は開催されていない (東京断酒新生会 , 2020)。

8 実際に断酒会員が、隈取（くまどり）の化粧も鮮やかに歌舞伎役者を真似て舞台に立つ。その様子を東京断酒新生会の機関紙「しんせい」は、以下のように描いている。「演芸最後の出し物は大喜利『酒乱止み五人男』。拍子木の音も鮮やかに、口上の後、選ばれし五人が白波五人男に扮し、その容姿や酒害体験を支えた台調回しに笑いや大声援があり、会場は大いに盛り上がり終盤を迎えました」(東京断酒新生会 , 2020, p. 4)。

9 東京断酒新生会は、公式のホームページ（https://www.tokyo-danshu.or.jp）を持っていて、そこから例会の日程表がダウンロードできる。

10 東京断酒新生会に、このようなクローズドの例会があることは、あまり知られていない。

11 毎日どこかで例会が開かれていると、毎日例会に通うことができる。毎日例会に通うことは、断酒を続ける力になると考えられている。

12「断酒体験」と「飲酒体験」の違いについては、後で再度、語られている。断酒歴が長い会員から「断酒体験」を聞かされることは、断酒を始めたばかりの会員には抵抗があるという指摘は重要だろう。

13「指針と規範」とは、全日本断酒連盟が「回復のためのプロセスと断酒会基本理念の解説書」（全日本断酒連盟 , n.d.）として 1 冊 300 円で配布している小冊子である。全日本断酒連盟 (1990a) によると、1989 年 10 月 21 日に開かれた顧問会議で、顧問の医師から「AA の様な

12 の伝統・12 のステップを考えてはどうか」と助言されたという。それに対して当時の全日本断酒連盟の井原理事長は「全断連も今は曲がり角、本日の先生方のご意見を充分に参考にして、全断連も新しい方向を考えたい。12 のステップ、12 の伝統 . . . 等早急に実施に移し、全断連も脱皮を計りたい 」と答えている。翌年 1 月 27-28 日に行われた「常任理事懇談会」では、「小林常任理事より、AA の『12 のステップ』『12 の伝統』に対応するものとして全断連の (イ) 新生への道しるべ（仮称）(ロ) 融合への規範（仮称）のたたき台になる案件を 3 月定期常任理事会に上程、ご審議願いたいと発言、一同これを承認し」たという（全日本断酒連盟 , 1990b）。そして 1990 年 3 月 25 日に開かれた定期常任理事会で「断酒新生への指針（仮称）」「断酒会融合の規範（仮称）」の試案が出されている（全日本断酒連盟 , 1990c）。1990 年 6 月 10 日、全日本断酒連盟第 20 回通常総会で「従来内外から要望のあった全断連基本理念（AA の 12 のステップ、12 の伝統に該当する）について小林常任理事にその試案の説明を求め、これを受けて小林常任理事は執筆者の立場から . . . ○断酒新生指針、○断酒会規範　について逐条的に解説を行い、更にこれに詳しい解説書を附して製本の上、明春までに出版いたしたい旨報告、一同これを了承した」（全日本断酒連盟 , 1990d）。その「指針と規範」は 1991 年 3 月に発行された（全日本断酒連盟 , 1991）。このように「指針と規範」は、一貫して AA を意識して作成されたこと、顧問の医師から提案されて 1 年半後には出版していることに注目したい。

14 なだいなだは、著名な作家であり、医師としてアルコール専門病棟として先駆的な久里浜病院で勤務していた。全日本断酒連盟の初代会長である松村春繁の良き理解者だった。この医師と松村の出会いは小林 (1990) が活き活きと描いている (pp. 198-205)。この著者、小林哲夫は、注 7 で言及した小林常務理事である。なだ自身も、松村との出会いを本に書いている（なだ , 1996, pp. 101-105; 1998, pp. 161-165）。

15 東京断酒新生会の場合、かつては、各支部で開かれる例会では、その支部の会長、他の支部の会長には専用の席が用意されていた。インタビューのなかでもあるように、その伝統は無くなりつつある。

16 全日本断酒連盟所属の断酒会では「断酒の誓い」を出席者で朗唱する。

17 断酒会から会員が離れないようにすることは「定着」と呼ばれ、断酒会のなかでは、会員数を維持するときに優先して考えるべきこととされている。全日本断酒連盟組織強化部会 (2011) 参照。

18 メルボルン大学教授 Richard Chenhall のこと。以前、私は彼とともに東京断酒新生会の調査を行った。禅との関係は Oka & Chenhall (2015) で述べた。榎本 (1985) も、断酒会の活動と禅の「只管打坐」の類似性を指摘している。

19 断酒会では、女性の酒害者をアメシストと呼ぶ。

【関連文献】

荒木守 (1997)「断酒会の役割」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』32(4), 265.

朝比奈寛正 (2021)「当事者が体験談を語る心構えと支援者の関与：精神障害者ピアサポーターと断酒会員を比較して」『日本アルコール関連問題学会雑誌』23, 57-61.

Chenhall, Richard D., & Oka, Tomofumi. (2014). “Self-help groups for alcoholics in Japan: Model of ‘recovery.’” In J. Breaden, S. Steele, & C. S. Stevens (Eds.), Internationalising Japan: Discourse and practice (pp. 125-141). New York: Routledge.

Chenhall, Richard D., & Oka, Tomofumi. (2016). “‘The Way of Abstinence’: Stigma and spirituality in Danshukai, a Japanese self-help organisation for alcoholics.” Japanese Studies, 36(1), 105-124.

Chenhall, Richard. D., & Oka, Tomofumi. (2009). “An initial view of self-help groups for Japanese alcoholics: Danshukai in its historical, social, and cultural contexts.” International Journal of Self-Help and Self Care, 5(2), 111 - 152.

土井章良 (1987)「断酒会でみたアルコール依存症者の予後」『精神神経学雑誌』89(6), 407-431.

土井章良・吉田成良・江藤幹夫 (1979)「課題集団としての断酒会：徳島断酒会での経験」『精神神経学雑誌』81(3), 224-229.

榎本稔 (1985)「断酒会と AA：比較文化精神医学的考察」『アルコール医療研究』2(2), 157-165.

福田雄一 (2003)「アルコール依存症者の断酒会における体験と回復過程との関連」『広島文教女子大学紀要』38, 155-164.

下司孝麿 (2004)「断酒会発祥からの足跡」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』, 11(1), 63-70.

下司孝麿 (1972)「断酒会について：酒をやめたいアルコール中毒者自身の会」『教育と医学』20(2), 38-45.

橋本勝之 (2002)「(社) 全日本断酒連盟 (全断連)」『精神障害とリハビリテーション』6(2), 103.

東牧子 (2009)「『きくこと』を考える：断酒会での『きくこと』の意味をとおして」『花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要』3, 25-32.

平坂信男 (2018)「酒害から立ち直るために：断酒会でのコミュニケーションの重要性」『心の健康』140, 18-21.

平沢照雄 (2016)「オーラルヒストリー：秋田における新 LED 電球の開発：サイカツ建設・齊藤勝俊氏、新屋工業・加藤慎一氏に聞く」『筑波大学経済学論集』68, 145-186.

廣瀬靖雄・加藤秀明・須田圭三 (1988)「地域特性に基づいた断酒会活動：岐阜県飛騨地方の経験から」『民族衛生』54(5), 234-239.

人見佳枝 (2009)「分析心理学におけるアルコール依存症：断酒会初代会長 松村春繁における individuation process」『近畿大学臨床心理センター紀要』2, 101-107.

本間利通 (2009)「セルフヘルプ・グループの特性：断酒会を事例として」『流通科学大学論集経済・経営情報編』18(1), 137-149.

堀井茂男・松下武志・山本訓也・田所溢丕・橋本勝之 (2004)「高齢アルコール依存症者の断酒の動機･継続の要因について : 断酒会と専門医療機関のアンケート調査」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』39(4), 300-301.

方仁成 (2006)「断酒会におけるアルコール依存症者の回復過程」『心理臨床学研究』24(4), 464-475.

猪野亜朗 (1991)「アルコール依存症の短期予後と長期予後：断酒会員の追跡調査から」『精神神経学雑誌』93(5), 334-358.

石井宏祐 (2017)「自助グループによって促されるアルコール依存症からの回復に関する家族療法的考察：アルコホーリクス・アノニマスと断酒会に着目して」『鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要』23, 1-18.

伊藤益一 (2012)「アルコール依存症：断酒会及び病院職員アンケートを通して考えられる病院の役割について」『正光会医療研究会誌』9(1), 18-33.

上堀内秀雄編 (1979)『あなたの断酒入門：断酒は正しいやり方で（増補版）』断酒友の会本部出版部

片岡睦子・杉山敏宏・谷岡哲也・片山秀史・吉田精次・橋本文子・大森美津子 (2009)「断酒会入会者を対象とした調査 (その 3) 婚姻および断酒会の有用性」『香川大学看護学雑誌』13(1), 101-107.

片山秀史・杉山敏宏・片岡睦子 (2009)「断酒会入会者を対象とした調査 (その 2) 婚姻状況と飲酒関連行動と断酒に関する認識との関係」『徳島大学医学部 JNI』7(1), 16-22.

加藤良寛・武田文・三宅健夫・横山英世・大井田隆 (2004)「断酒会会員における抑うつと心理社会的要因」『日本公衆衛生雑誌』51(8), 603-611.

小林哲夫 (1986)「感性の回復と断酒」『アルコール医療研究』3(4), 295-299.

小林哲夫 (1990)『松村春繁：断酒会初代会長』特定非営利活動法法人 ASK.

小林哲夫 (2000)「断酒会:分かち合い、癒し合う:断酒会でなぜ回復するのか」『こころの科学』91, 48-52.

熊澤由美子・米山 奈奈子 (2011)「X 県の地域断酒会活動の継続に向けたリーダーの思い」『秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要』19(1), 67-76.

前田周二 (2012)「夫婦面接から得られたアルコール依存症者の回復プロセス : 断酒会に通う夫婦を対象とした質的研究」『日本看護学会論文集精神看護』42, 230-232.

真野元四郎 (1981)「断酒会とソーシャルワーカー」『ソーシャルワーク研究』6(4), 210-212.

丸田和夫 (2013)「断酒会活動におけるスピリチュアリティ : 私の課題と念仏のいただき」『龍谷大学大学院実践真宗学研究科紀要』1, 170-175.

眞崎睦子 (2013)「日本型自助組織『断酒会』の誕生とその役割『北海道大学大学院教育学研究院紀要』119, 167-176.

松島恵介 (1993)「語りとしての想起 : 断酒会における過去語りについての一考察」『日本教育

心理学会総会発表論文集』35, 184.
松下武志 (1985)「島根における断酒会活動の歴史と現状」『島根大学法文学部紀要文学科編』8(1), 139-158.
松下武志 (1990)「今日の断酒会活動における若干の課題」『社会学研究』55, 137-154.
松下武志 (1997)「自助集団の分化と統合：宮城県青葉断酒会のケース」『京都教育大學紀要 A 人文・社会』90, 213-223.
松下武志 (2007)『酒害者と回復活動』学文社
松下武志 (2009)「停滞する日本型断酒会と活性化の方向」『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』78, 43-58.
三好真人 (2019)「断酒会会長たちが抱える運営に関する問題の検討」『心理臨床学研究』37(5), 421-432.
三好真人・森本宏輝・橋本有理・谷渕真也 (2021)「アルコール依存症者が独身状態で断酒会へコミットメントする体験」『コミュニティ心理学研究』24(2), 81-94.
森岡洋 (1988)「断酒会」『醫學のあゆみ』146(1): 51-52.
森真一 (2008)『ほんとはこわい「やさしさ社会」』筑摩書房 .
なだいなだ (1996)『新装版：アルコール中毒：物語風』五月書房 .
なだいなだ (1998)『アルコール問答』岩波書店 .
南雲智映・梅崎修 (2013)「総評全金住友重機械支部の活動と組合分裂：星加文夫氏・藤井正剛氏オーラルヒストリー」『生涯学習とキャリアデザイン』（法政大学キャリアデザイン学会研究紀要）11(1), 91-108.
中島芽理 (2016)「断酒会の空間的展開と『アルコール依存症』の構築」『日本地理学会発表要旨集』2016s, 100075.
中島芽理 (2020)「アルコール依存症からの回復の場所」『日本地理学会発表要旨集』2020s, 223.
中島芽理 (2022a)「アルコール依存症者のライフヒストリーにみる『癒しの場所』の変容」『日本地理学会発表要旨集』2022s, 32.
中島芽理 (2022b)「アルコール依存症の『癒しの景観』：日本における自助グループの確立と寄せ場での再編」『人文地理』74(2), 155-177.
中本新一 (2007)「断酒会の現状と課題：内的経験を通して」『同志社政策科学研究』9(2), 161-171.
中村希明・東野忠和・霜田一男 (1975)「断酒会の社会精神医学的研究 1：関東・東海・甲信越の断酒会の活動状況調査をもとにして」『精神医学』17(9), 999-1006.
中田陽造 (1996)「阪神大震災で認められた断酒会の意義」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』31(4), 326-327.
中田陽造 (1998)「阪神大震災で認められた断酒会の意義：第 2 報」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』33(4), 408-409.

西田大介・原田小夜 (2017)「自殺未遂歴のある男性アルコール依存症者が再企図予防に影響した事由：断酒会参加者による体験の語りから」『日本健康医学会雑誌』26(3), 145-146.

野田哲朗 (1998)「震災が被災地断酒会員に及ぼした影響」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』33(4), 402-403.

小俵ミエ子・石原和子 (2009a)「アルコール依存症者と家族の断酒会参加による意識の変化に関する研究」『日本精神科看護学会誌』52(2), 228-232.

小俵ミエ子・石原和子 (2009b)「アルコール依存症者の断酒会参加の意味に関する研究」『インターナショナル nursing care research』8(4), 37-46.

Oka, Tomofumi. (2011).“The‘New Life’model of a Japanese self-help group for alcoholics.”Sophia University Studies in Social Services, 35, 16-35.

Oka, Tomofumi. (2013).“Danshu-no-michi,‘The Way of Abstinence’: Japanese cultural-spiritual model of alcohol abstinence developed by alcoholics’self-help groups.”Sophia University Studies in Social Services, 37, 5-30.

Oka, Tomofumi, & Chenhall, Richard D. (2015).“Spirituality and Japanese self-help groups for alcoholics: Zen Buddhism for abstinence.”In E. Lanphar & A. Wilczek (Eds.), Understanding new perspectives of spirituality (pp. 197-212). Leiden: Brill.

岡田ゆみ (2004)「長期断酒体験で築かれた断酒への意識」『日本看護研究学会雑誌』29(2), 73-79.

岡田ゆみ・齊藤由香・藤本千里・園中希依子 (2009)「 就労している断酒会員のレジリエンスと適応に向けた態度志向」『日本看護学会論文集精神看護』40, 146-148.

大原健士郎・高木正勝 (1972)「高知県断酒新生会員の調査」『精神医学』14(9), 861-865.

大橋薫 (1970)「高知市における酒害者の一研究：高知市断酒会の例をとおして」『明治学院論叢』165, 61-78.（注：タイトルは高知市断酒会となっているが、本文では高知県断酒新生会である。誤植と思われる。）

大橋薫 (1978)「アルコール依存者の飲酒行動と断酒努力：断酒会会員の場合から」『社会学ジャーナル』3(1), 11-31.

大橋薫・吉兼秀夫 (1979)「断酒会会員を通してみたアルコール依存者の飲酒行動と断酒努力：高知市、東京都、北九州市の地域の比較から」『明治学院論叢』273, 1-28.

大橋薫・石井毅・石川義博 (1977)「断酒会会員を通してみたアルコール依存者の飲酒行動と断酒努力」『明治学院論叢』258, 1-29.

大森勇・今津博市 (1979)「全国の断酒会に対するアンケート調査」『交通医学』33(4), 264-271.

大野佳枝 (2003)「断酒会既婚者の意識変容に関する実証的研究」『アディクションと家族』20(1), 66-74.

大野徹監修 (1977)『こうして自分との闘いにかった：アルコール中毒者の手記』日新報道 .

大野徹 (1980)「断酒会の活動状況と利用の仕方」『ケース研究』177, 35-50.

大槻元 (2013)「全日本断酒連盟の取り組みを振り返る」『日本アルコール関連問題学会雑誌』15(2), 43-46.

大槻元 (2017)「断酒会 : これまでの歩みと今後の発展に向けて」『公衆衛生』81(9), 746-750.

小澤美和・水野芳子・篠原百合子 (2013)「断酒会会員及び家族の医療機関への要望と今後の課題」『醫學と生物學 : 速報學術雑誌』157(6-2), 1084-1088.

齋藤利和 (2016)「自助グループの歴史と変遷」『Frontiers in alcoholism = アルコーリズム : アルコール依存症と関連問題』4(2), 105-109.

坂元義篤 (2018)「断酒会活動参加によるアルコール依存症からの回復」『日本アルコール関連問題学会雑誌』20(1), 35-38.

佐野雪子・巽あさみ (2019)「アルコール依存症者が断酒と就業を両立するプロセス：入院歴のある断酒会員における社会的相互作用」『日本地域看護学会誌』22(2), 15-24.

佐藤忠宏 (1973)「アルコール中毒患者の予後調査：断酒会との関係において」『精神医学』15(11), 1167-1176.

佐藤忠宏・唐住輝・荻野新六・鷲山純一 (1973)「アルコール中毒患者の予後調査：断酒会との関係において」『精神医学』15(11), 1167-1176.

四戸智昭 (2001)「わが国の断酒会活動とアルコール医療政策に関する若干の考察」『家族機能研究所研究紀要』5, 66-71.

清水めぐみ・原田小夜 (2020)「自らの飲酒問題に取り組む男性高齢者の体験」『日本アルコール関連問題学会雑誌』22(1), 114-119.

清水新二 (1978)「断酒会活動と断酒率」『日本都市医学会誌』10, 71-73.

清水新二 (1980)「断酒会の集団的性格」大橋薫編『アルコール依存の社会病理』(pp. 215-230) 星和書店 .

清水新二 (1986)「匿名性と組織防衛：断酒会の内と外」『アルコール医療研究』3(4), 283-288.

清水新二・麻生克郎・野田哲朗 (1999)「阪神淡路大震災と断酒会活動：断酒会調査自由記載回答分析」『精神保健研究』12, 77-94.

篠原百合子・伊藤美和・水野芳子・小林美子・安田美弥子 (2010)「北海道北部地域における断酒会の活動実態と今後の課題」『地域と住民 : 道北地域研究所年報』28, 1-8.

心光世津子 (2002)「断酒に至る認識変容過程：断酒会会員を例として」『看護研究』35(3), 239-249.

心光世津子 (2010)「保健医療福祉分野における当事者の語りと当事者性の形成：断酒会会員の語りと当事者性に焦点をあてて」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』36, 59-80.

Smith, Stephan. R. (1998). Good old boy into alcoholic: Danshukai and learning a new drinking role in Japan. In J. C. Singleton (Ed.), Learning in likely places: Varieties of apprenticeship in Japan (pp. 286-303). New York: Cambridge University Press.

杉山敏宏 (2008)「断酒会会員のアルコール依存症の認識過程の明確化」『青森中央短期大学研究紀要』21, 71-83.

杉山敏宏・片岡睦子・谷岡哲也 (2009)「断酒会入会者を対象とした調査 (その 1) 婚姻状況と飲酒による問題行動」『徳島大学医学部 JNI』7(1), 10-15.

杉山敏宏・谷岡哲也・上野修一・片山秀史・越智百枝 (2007)「断酒会会員の断酒に至る過程に関する実態調査」『徳島大学医学部 JNI』6(2), 83-88.

Suwaki, Hiroshi. (1979). Naikan and Danshukai for the treatment of Japanese alcoholic patients. British Journal of Addiction, 74(1), 15-19.

洲脇寛・蒲田晴雄・高田恒子・大井武子 (1974)「岡山断酒新生会会員の実態調査」『慈圭会精神医学研究所業績』7, 25-30.

田所溢丕 (2004)「断酒会の機能」『精神科臨床サービス』4, 12-16.

高木寛治・八木文代・尾高富士江・影山晴勇 (1981)「グループワークからみた保健所と断酒会：津山断酒新生会の事例」『公衆衛生』45(8), 619-623.

高橋茂・堀井茂男・藤本明・洲脇寛・西井保行 (1981)「岡山県における断酒会会員の実態調査」『岡山医学会雑誌』93(7), 729-738.

飛田好一 (1981)「断酒会」『ソーシャルワーク研究』6(4), 207-210.

豊山宗洋 (2013)「大阪方式による断酒会活動の社会運動論的分析」『経済社会学会年報』35, 218-220.

豊山宗洋 (2016)「断酒会の『否認・自発性問題』: 会員減少問題の予備的考察」『経済社会学会年報』38, 237-245.

豊山宗洋 (2020)「断酒会における当事者の絆とその形成要因」『経済社会学会年報』42, 27-33.

東京断酒新生会 (2008)『東京断酒新生会 55 年史』.

東京断酒新生会 (2020.01.01)「第 52 回奥様（家族）に感謝を捧げる酒なし忘年会：280 名が江東区文化センターに集う！」『しんせい』608, 4.

辻本士郎 (1983)「断酒会」『治療』65(5), 1056-1060.

植松弘夫 (2009)「断酒会の活動について」『月刊地域保健』40(2), 54-59.

山口恵・篠原百合子 (2013)「断酒会における女性アルコール依存症者の回復」『日本精神科看護学術集会誌』56(2), 102-106

山口恵・篠原百合子・伊藤美和・デッカー清美 (2013)「女性アルコール依存症者の回復要因の検討」『醫學と生物學 : 速報學術雑誌』157(6), 905-910.

山本玲菜 (2010)「アルコール依存症者の経験の意味:断酒会参加者の語りから」『精神保健福祉』41(3): 184.

與座千代子 (2012)「保健師による地域でのアルコール関連問題への取り組み : 断酒会支援を中心に」『月刊地域医学』26(9), 845-849.

全日本断酒連盟 (1983)『躍進する全断連 20 周年記念号』.

全日本断酒連盟 (1990a)「第 1 回顧問会議開かれる：医療各先生より活発なるアドバイス !!」『かがり火』35, 3.
全日本断酒連盟 (1990b)「初めての 1 泊 2 日の常任理事懇談会開かれる」『かがり火』36, 1.
全日本断酒連盟 (1990c)「平成元年度常任理事会終わる：改革の方向に討議白熱 !!」『かがり火』37, 1.
全日本断酒連盟 (1990d)「第 20 回通常総会 大阪で開催 !!」『かがり火』39, 2.
全日本断酒連盟 (1991)「“指針と規範”」『かがり火』42, 5.
全日本断酒連盟 (2004)『躍進する全断連 2004 年度版』.
全日本断酒連盟組織強化部会 (2011)『アクション・プラン：断酒会発展のために』全日本断酒連盟 .
全日本断酒連盟 (2022.12)『みんなの全断連短信 141 号』全日本断酒連盟 .
全日本断酒連盟 (n.d.)『図書案内』https://www.dansyu-renmei.or.jp/tosho/index.html (2023.1.1)